

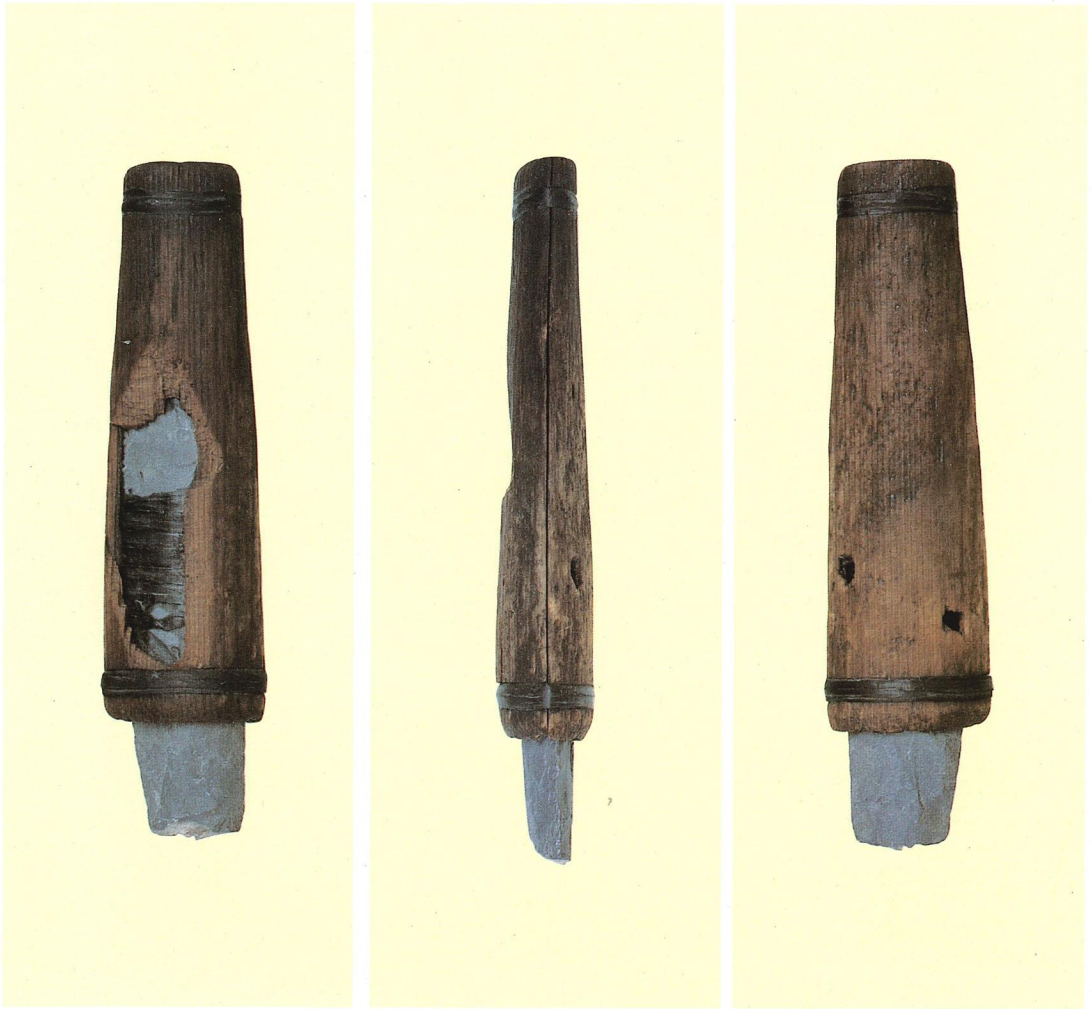
昭和57年度

唐古・鍵遺跡

第13・14・15次発掘調査概報

1983

田原本町教育委員会



鞘入り石剣（第13次調査S D-02中期溝出土）

発刊のことば

このたび、昭和57年度に行いました唐古・鍵遺跡の第13・14・15次発掘調査概報を発刊することになりました。

田原本町は、青垣山をめぐる奈良盆地の中央部にあって、沖積層からなる肥沃な穀倉地帯で、数多くの埋蔵文化財が包蔵されています。なかでも唐古・鍵地区一帯は屈指の包蔵地です。

田原本町教育委員会では、奈良県立橿原考古学研究所に依頼して、関係各位のご協力を得、昭和52年度の第3次調査から本格的な発掘調査を実施し、今回の15次まで進める事が出来ました。昭和57年5月から考古学担当の職員を配置し、古代文化の保存と歴史の解明に鋭意努力しているところであります。

この概報は昭和57年度実施した3ヶ所の調査結果を掲げておりますが、範囲確認調査の報告としては決して充分とはいえませんが、ご理解の上ご利用賜れば幸甚です。

今後もおって調査を実施していく予定であり、あわせて唐古・鍵遺跡の史跡指定にむけ準備を進めているところであります。どうか関係各位のご協力とご指導をお願いする次第であります。

田原本町教育委員会教育長 岩 井 光 男

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が昭和57年度国庫補助事業として実施した奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡の第13、14、15次発掘調査概報である。
2. 発掘調査は橿原考古学研究所の指導を得、現地調査は田原本町教育委員会藤田三郎が担当した。
3. 調査に際しては土地所有者をはじめ、唐古・鍵在住の方々に御理解と御協力を賜った。記して感謝したい。
また、調査補助ならびに整理、概報作製にあたっては
加藤謙（現安芸高校教諭）、豊岡卓之、岡部裕俊、福島摂、杉浦佐智子、外山晃久、水ノ江和同（同志社大学）、藤田至希子（奈良大学OB）、千喜良淳（関西大学）、松田祥子（大谷大学OB）、石橋源一郎（田原本中学校教諭）の諸氏に協力して頂いた。
4. 調査及び概報作製にあたっては下記の方々より御教示、御協力を賜った。記して感謝します。
同志社大学森浩一先生ならびに橿原考古学研究所石野博信、泉森皎、中井一夫、寺沢薫、松本洋明、奈良市教育委員会森下恵介、大阪府教育委員会宮崎泰史の諸氏、また骨の鑑定には早稲田大学金子浩昌先生及び宮崎氏に、樹種の鑑定には奈良国立文化財研究所光谷拓実氏、岩石の鑑定には刑部小学校教諭奥田尚氏に依頼した。
なお、鞘入り石剣は森先生の御厚意により同大学で撮影し、本書への掲載も快諾して頂いた。
5. 本概報の報筆は目次に明記した。最終的に藤田が編集をおこなった。

本 文 目 次

はじめに	（藤 田）	1
I. 第13次発掘調査の概要		
1. 調査の全容	（藤 田）	2
2. 遺構		
(1). 層序	（藤 田）	3
(2). 溝 SD-01（藤田）、SD-02、SD-03（豊岡）、SD-04、 SD-05、SD-06、SD-07、08、09（藤田）		4
(3). 土坑 SK-03、05（藤田）、SK-07（豊岡） SK-10、SX-01（藤田）		10
3. 遺物		
(1). 土器	（藤 田）	11
(2). 石器・骨角製品	（豊 岡）	18
(3). 木製品	（岡 部）	20
(4). 鐸形土製品、鞘入り石剣、武器形石器	（藤 田）	24
4. まとめ	（藤 田）	25

Ⅱ．第14次発掘調査の概要

1．調査の全容	(藤 田)	27
2．遺構		
(1)．層序	(藤 田)	27
(2)．弥生時代前期の遺構	(藤 田)	27
S K—201、S K—202、S K—203		
(3)．弥生時代後期の遺構		30
S K—101、S K—102、S K—103 (藤田)		
柱穴群 (豊岡)		
(4)．中世の遺構	(藤 田)	31
S B—01、S B—02、S K—06		
3．遺物		
(1)．土器		32
S K—202、203出土土器 (水ノ江)、S K—106出土土器 (豊岡)		
(2)．鏡、送風管、管玉	(藤 田)	35
4．まとめ	(藤 田)	35

Ⅲ．第15次発掘調査概要

1．調査の全容	(藤 田)	37
2．遺構と遺物		
(1)．層序	(藤 田)	37
(2)．遺構 S D—01 (藤田)、S D—02 (岡部)、S D—03、S D—04 (豊岡)		38
(3)．遺物	(藤 田)	39
3．まとめ	(藤 田)	39
付載 田原本町所在遺跡立会調査一覧表		40

はじめに

唐古・鍵遺跡の範囲確認調査も6年目をむかえたが、昭和55年度までの檀原考古学研究所による発掘調査によって遺跡の内容が徐々に明らかにされてきた。第3、4、6、9、10、12次調査ではムラを囲む大溝の検出とその外部の状況がおさえられ、また、第5、8、11次調査においてはムラ内部の様相が解明されてきた。特に第3次調査の銅鐸鑄造関連遺物や第11次調査の鶏頭形土製品など注目すべき遺物の出土や遺跡規模の大きさとその保存状態の良さから当遺跡の重要性が再認識されつつある。

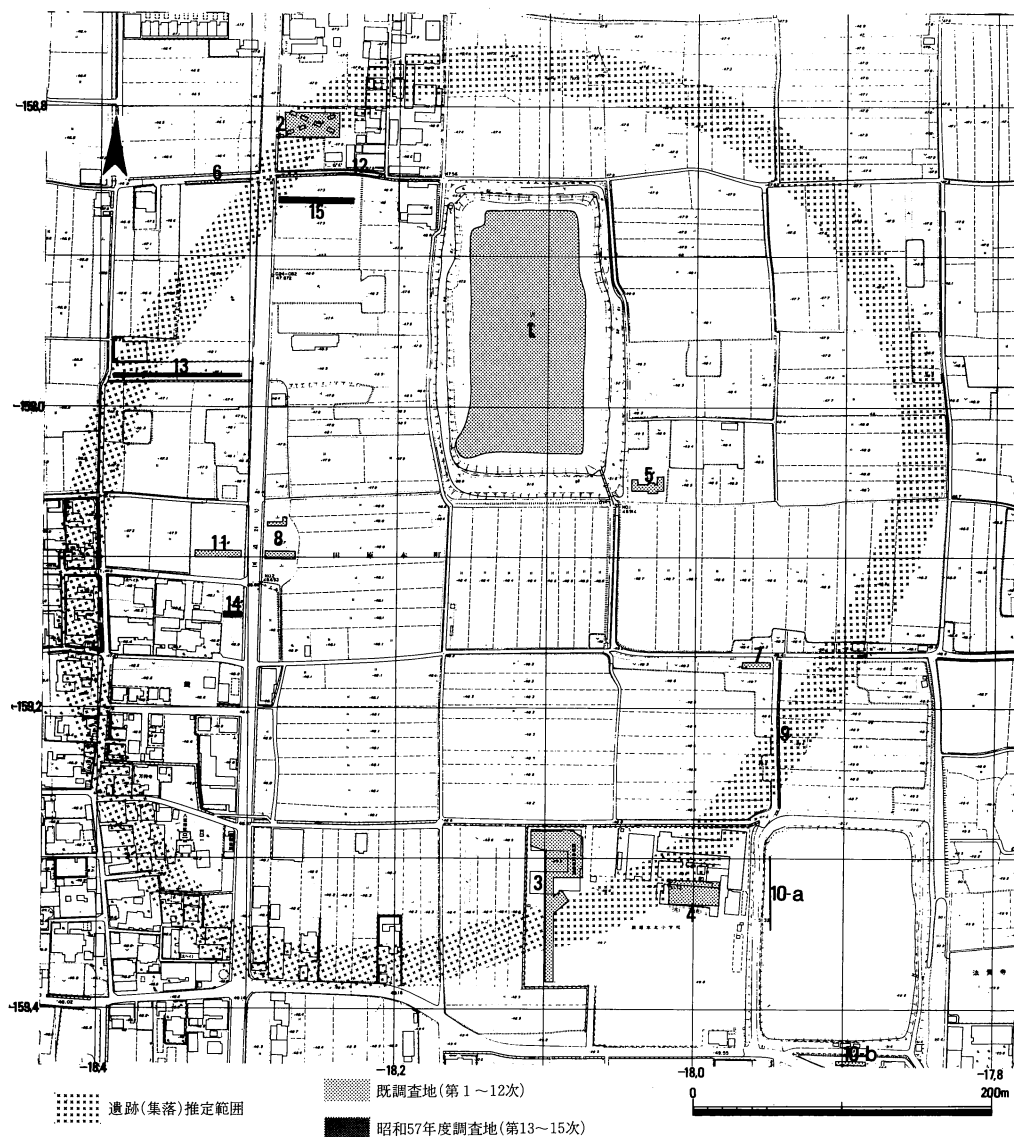


図1 唐古・鍵遺跡の範囲と調査地点

第1表 昭和57年度唐古・鍵遺跡発掘調査一覧表

調査次数	所 所 地	原 因	地 目	土地所有者	調 査 期 間	調査面積
第13次	唐古60-1番地	駐車場建設	造成地	吉岡清治	1982. 7.20~10.5	約215㎡
第14次	鍵306番地	貸店舗建設	畑	松井宏敏	1982. 11.16~12.25	約50㎡
第15次	唐古98-1番地	宅地造成	休耕地	中村孝司	1983. 1.11~2.15	約200㎡

さて、唐古・鍵遺跡における昭和57年度の調査は国道24号線沿線の計3件（第1表）であり、いずれも開発行為によるものである。近年、この国道沿いにも開発の波が押し寄せてきており、早急に遺跡の範囲確認と保護処置をおこなう必要にせまられてきている。

今年度の調査では遺跡の北西部にあたる調査が2件（第13、15次）あり、遺跡の範囲確認には好資料を提供してくれた。また、第14次調査ではムラ内部の実態を知る上で重要な遺構・遺物の出土があった。これら三件の調査は当遺跡の内・外部を理解する上で貴重な発掘調査となった。

注①—a	橿原考古学研究所編『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』	田原本町教育委員会1978
—b	同 『昭和53年度唐古・鍵遺跡第4・5次発掘調査概報』	田原本町教育委員会1979
—c	同 『昭和54年度唐古・鍵遺跡第6・7・8・9次発掘調査概報』	田原本町教育委員会1980
—d	同 『昭和55年度唐古・鍵遺跡第10・11次発掘調査概報』	田原本町教育委員会1981
—e	同 『昭和56年度唐古・鍵遺跡第12次発掘調査概報』	田原本町教育委員会1982

I. 第13次発掘調査の概要

1. 調査の全容

本調査地は唐古池の西方約100m 付近で第6次調査地と第11次調査地のほぼ中間地点にあたる。調査は2.5×80m の東西に長いトレンチを設定した。当地は水田面に1m の造成がおこなわれており、この整地土と水田耕土、床土及び第3層を機械力によって除去した。調査開始10日後には集中豪



写真1 唐古・鍵遺跡の水没(正面建物第3次調査地)
(国道から東方を望む)

雨による初瀬川堤防決壊の水がトレンチ内に流れ込み、トレンチは土砂によって埋没するという結果をもたらした。このため、トレンチ西端で検出していたSD-01は完掘不可能となった。しかし、他の遺構は幸いにも検出前であったため被害は少なかった。その後、トレンチ東端においてSD-06を検出したが、この大溝内にはトレンチを横断するようにケヤキ原木が横たわっており、その性格を明ら

かにするため、トレンチ北側に拡張区を設けた。

この調査では東西80mのトレンチに大溝5条が並走するという他に類をみない遺構群であって、遺跡の範囲確認とともにムラの北西端の状況や溝群の消長を考える上で重要な調査となった。

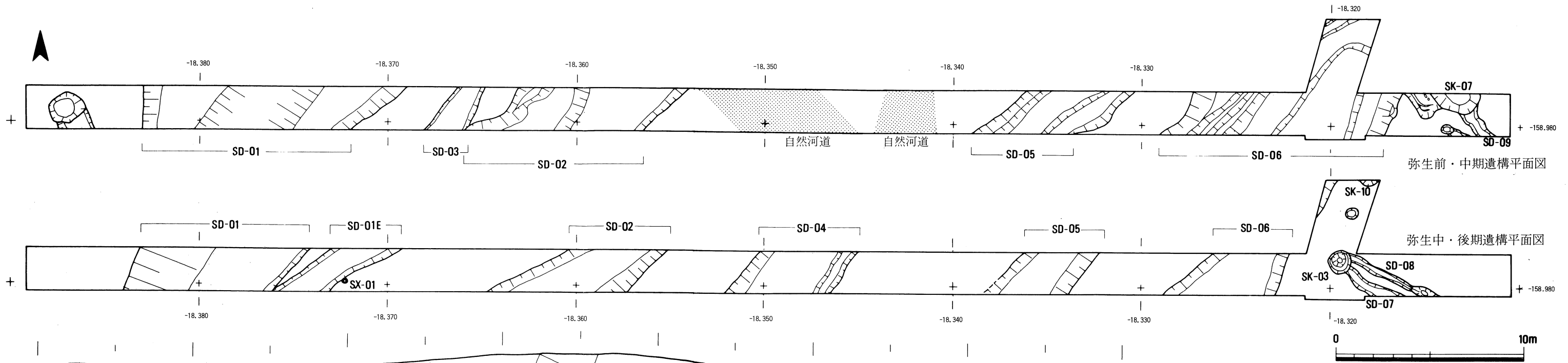
2. 遺構

(1). 層序

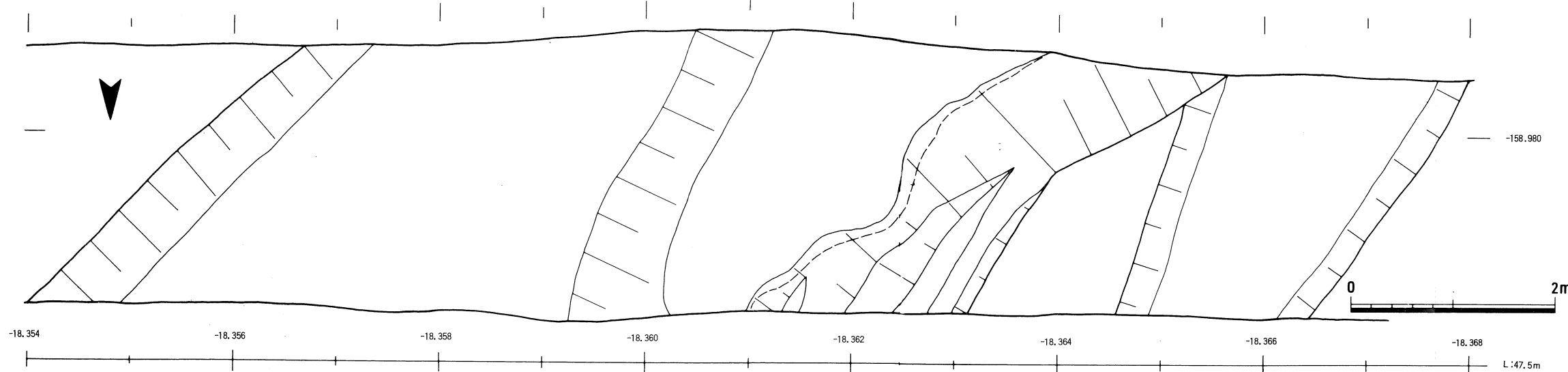
トレンチが80mにもおよぶため、基本土層自体、若干の質的变化や層の厚さには薄厚がみられる。盛地土を除き、第1層は水田耕土、第2層水田床土、第3層灰褐色粘質土層、第4層暗茶褐色土層、第5層明茶褐色粘質土層（黄斑文を含む）、第6層茶灰色粘質土層、第7層灰黄色微砂層、第8層青灰色微砂層、第9層暗青灰色粘土層、第10層黒色粘土層である。これらの層中、遺構を確認したのは第4層上面で東西に並走する中世素掘溝、第5層上面で弥生後期及び古墳時代前期の遺構、第7層上面で弥生前期・中期の遺構を検出した。調査の進行の都合上、遺構ごとに報告する。

第2表 第13次調査溝一覧表

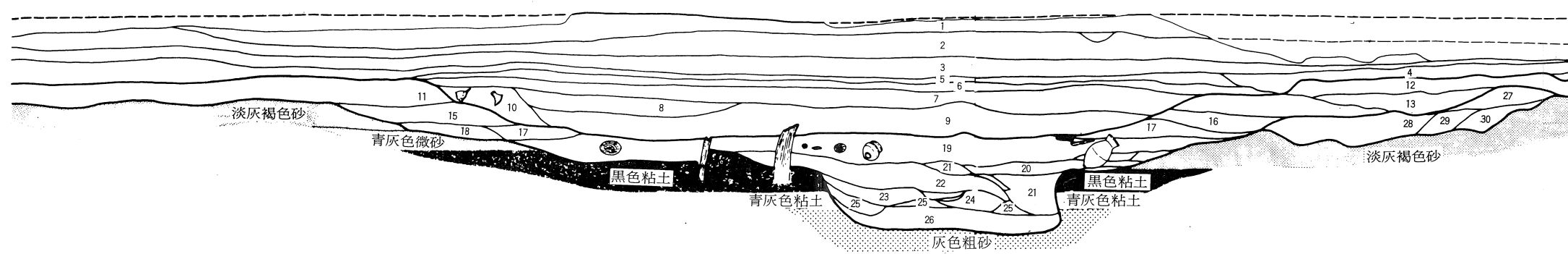
溝番号	規 幅	横(m) 深度	溝底 標高	走行方向	継 続 時 期					主 要 遺 物	
					I	II	III	IV	V		庄内
SD-01	1	推定11.5	—	—	南西—北東				---↔		木製臼、容器
	2 (B)	1.7	0.5	45.7	南南西—北北東				↔		
	3	7.0	0.7	45.5	南南西—北北東				↔—		
SD-02	1	推定6.3	1.2	45.0	西南西—北北東				↔		箕、丹塗板、鋤、木製匙 異形高杯、石剣、炭化米
	2	4.0	0.6	45.8	南西—北東				↔		
SD-03		2.4	0.5	45.8	南南西—北北東	↔					
SD-04		3.6	0.9	45.5	南南西—北北東				↔→		槽、建築材 完形土器群
SD-05	1	3.7	1.2	45.0	南西—北東				↔		完形土器群
	2	推定3.2	0.8	45.8	南西—北東				↔		
	3	2.7	0.5	46.1	南西—北東				↔		完形土器群
SD-06	1	10.5	1.6	44.6	南南西—北北東	←	-----	→			鐙形土製品、丹塗板、かぎ状木製 品、イノシシ下顎骨7体分など
	2	3.8	0.5	46.0	南南西—北北東				↔→		完形土器群
SD-07		0.4~1.0	0.1	46.3	東南東—西北西				↔		
SD-08		0.5	0.1	46.2	東南東—西北西				↔		
SD-09		1.0	0.3	46.0	南西—北東				↔→		



第1図 第13次調査遺構平面図



- SD-02南壁層序
- | | |
|-----------|-------------|
| 後期溝上層 6~7 | 中期溝上層 15~18 |
| 同 下層 8~10 | 同 中層 19~21 |
| | 同 下層 22 |
| | 同 最下層 23~26 |



- | | |
|-------------|--------------|
| 1. 耕土 | 17. 黒灰色粘砂土 |
| 2. 床土 | 18. 黒灰色粘土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 19. 褐色粗砂 |
| 4. 茶褐色土 | 20. 黒灰色砂質土 |
| 5. 暗灰褐色土 | 21. 灰白砂 |
| 6. 暗灰褐色砂質土 | 22. 黒褐色粘質土 |
| 7. 暗灰褐色砂質土 | 23. 灰白色粗砂 |
| 8. 黒灰色粘砂土 | 24. 黒灰色粘質土 |
| 9. 黒色粘質土 | 25. 黒褐色粘質土 |
| 10. 黒灰色砂質土 | 26. 灰白色砂礫層 |
| 11. 灰褐色土 | SD-03(27~30) |
| 12. 暗茶褐色粘質土 | 27. 暗灰褐色砂質土 |
| 13. 黒灰色土 | 28. 黒灰色粘質土 |
| 14. 暗灰色土 | 29. 黒灰色粘質土 |
| 15. 暗灰色砂質土 | 30. 暗灰黄色砂質土 |
| 16. 黒褐色粘砂土 | |

第2図 SD-02中期溝平面図及び断面図 (1/50)

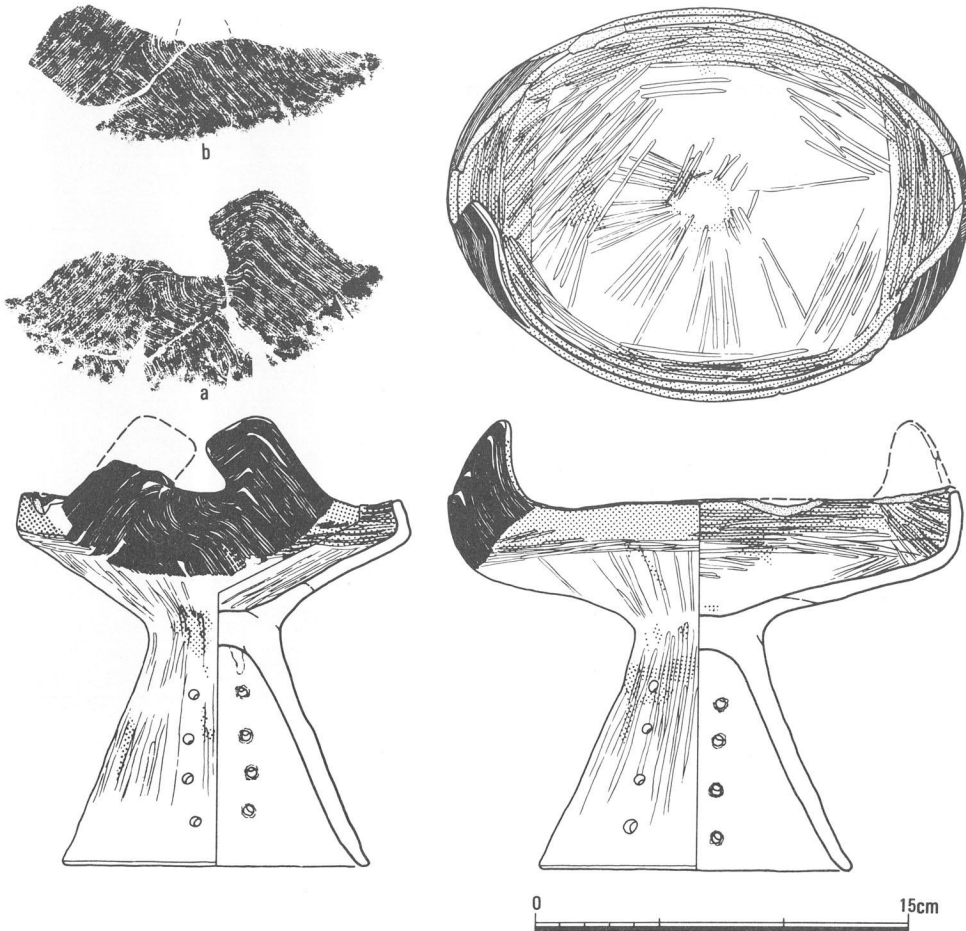
(2). 溝

S D—01

トレンチ西端で検出した大溝である。本溝は二度にわたり再掘削がなされており、いずれもほぼ南西から北東方向に走る溝である。初回の溝は最大幅約11.5mを計るが、前に述べたような状況により完掘はしていない。本溝は第Ⅳ様式中頃の土器を包含する粗砂層によって埋没している。その後、本溝の東肩近くに幅1.7m、深さ0.5mの小溝が形成されることになる。この小溝からはほとんど土器が出土しておらず、詳細な時期は不明であるが、この小溝の埋土をベースに第Ⅳ様式の甕棺墓がつくられていることから、第Ⅳ様式の時間中におさまる短期間の溝と考えられよう。三回目の掘削による溝は幅7m、深さ0.7mで比較的浅く幅広いものである。黒色粘土によって埋没しているが、この土層より第Ⅴ様式中頃の土器片が少量出土している。

S D—02

S D—01の東約7mをおいて、西南西から北東方向にわずかに湾曲するように検出された大溝である。発掘の結果、弥生時代中期・後期の2回の掘削がおこなわれていたことが確認された。



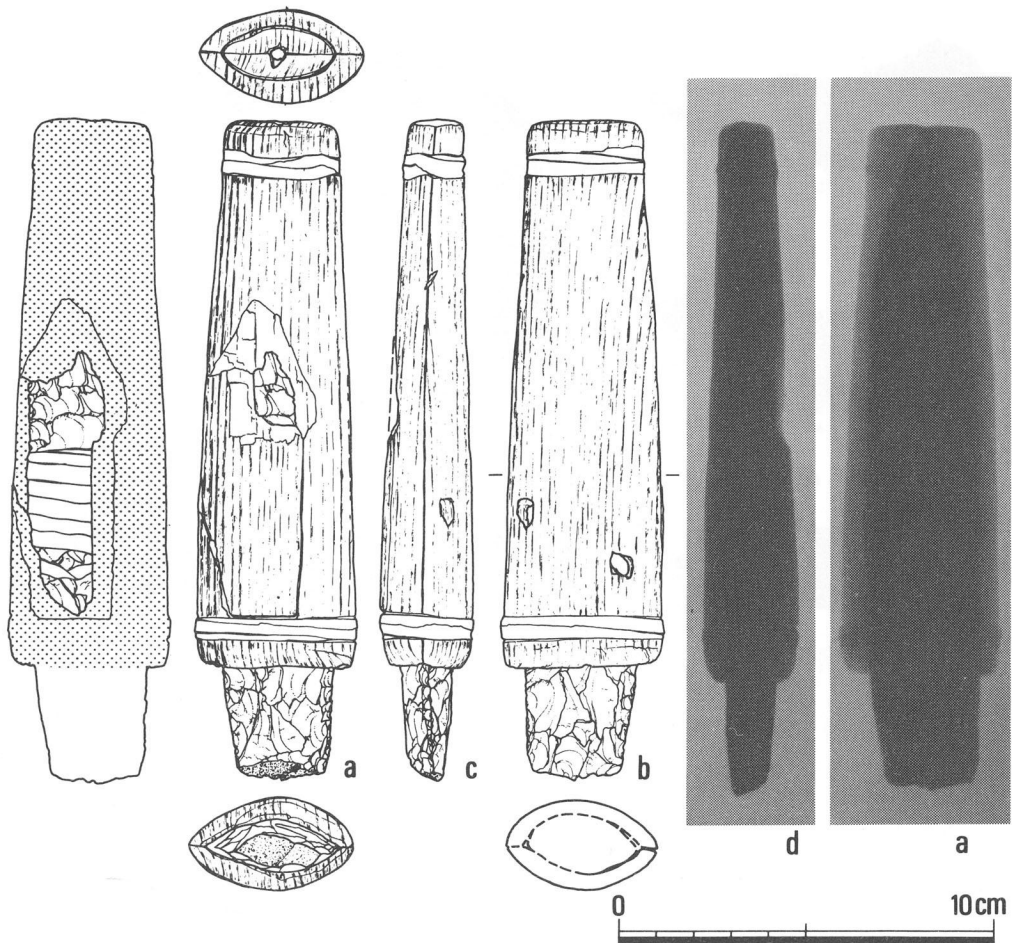
第3図 S D—02中期溝出土異形高杯(1/3)

中期溝は淡灰褐色砂層から掘削されている。溝西肩は小テラスをもち、下端でオーバーハングしている。東肩は幅広いテラスをもち、溝底はフラットな二段掘りがなされている。規模は幅約6.3m(推定)、深さ1.2mを計る。

堆積土は4層に大別され、上層(第15層～第18層)、中層(第19層～第21層)、下層(第22層)、最下層(第23層～第26層)である。

出土遺物は中層の粗砂層内に包含されていた水差し形土器、短頸壺のほか、建築材(板材、杭)や容器等の木製品がある。また下層からは多量の植物に密閉されて、甕4個体・異形高杯・箕・丹塗り板・鞘入り石剣・木製匙・着柄鋤と多量の炭化米が出土している。出土状態は甕・箕を中心として他の土器・木器が溝の深みの部分に集中するかたちであった。中・下層共に土器の示す時期は第Ⅳ様式中葉である。

後期溝は中期溝が完全に埋没した後、灰褐色土層より再掘削されている。規模は幅約4m(推



第4図 S D—02中期溝出土鞘入り石剣(1/2)

定)、深さ0.6mを計る。堆積土は二大別でき、上層(第6層~第7層)、下層(第8層~第10層)である。遺物は主に第10層より出土しており、第V様式中葉から後葉を示している。

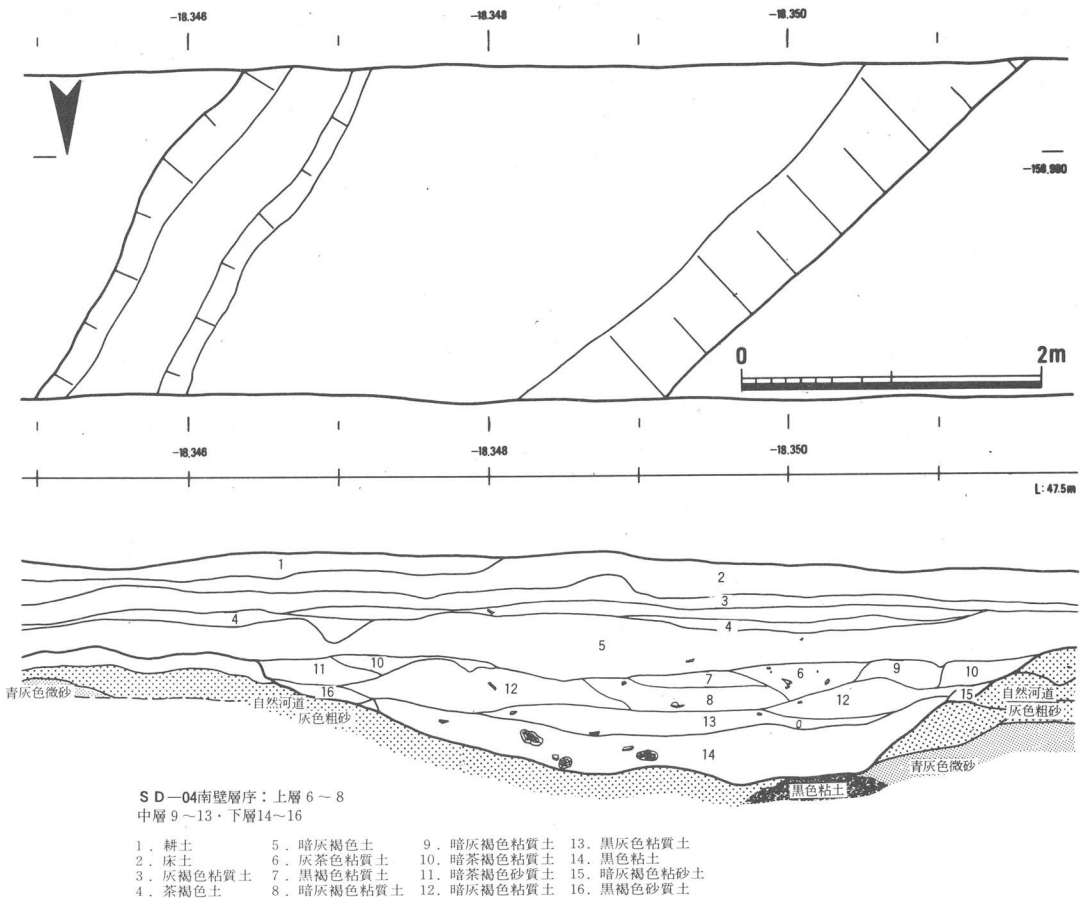
最後にSD-02の変遷を概観しておく。第IV様式期に掘削され、続いて中期最下層が堆積する。この堆積によって溝下段部の大半が機能を失うと同時に、一部分には深み状のものが形成される。次にこの東側に杭群が打ち込まれる。杭群の形成期は杭先の達している層位と溝内の堆積土の平面分布から帰納した結果である。多量の重要遺物を出土した下層(第22層)は、この杭群の西側に厚く堆積した状態で検出された。この後中期溝は洪水によると考えられる粗砂の多量の流入によって完全に埋没し、第V様式中葉に至って再び掘削されるのを待つことになる。再掘削された後期溝は、長期にわたって機能しなかったことが出土土器と層序から推定される。

SD-03

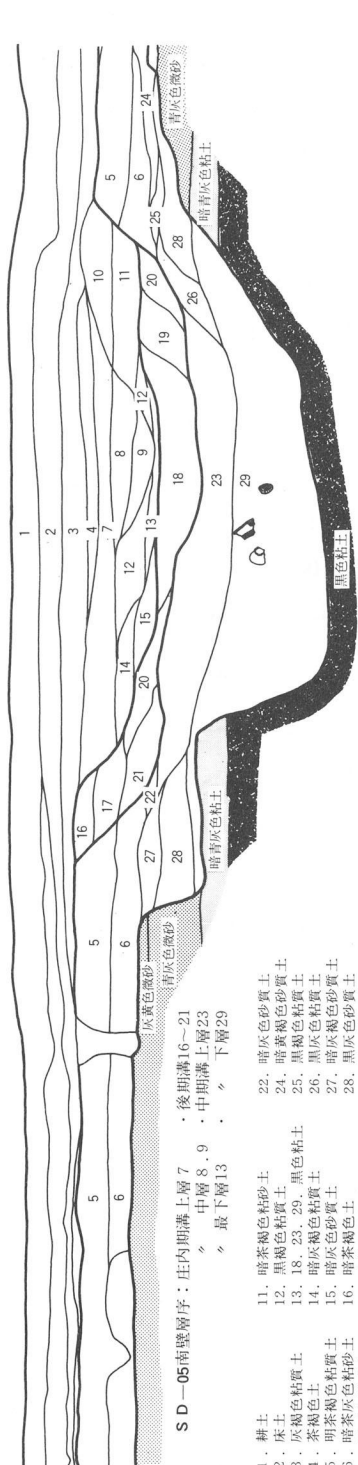
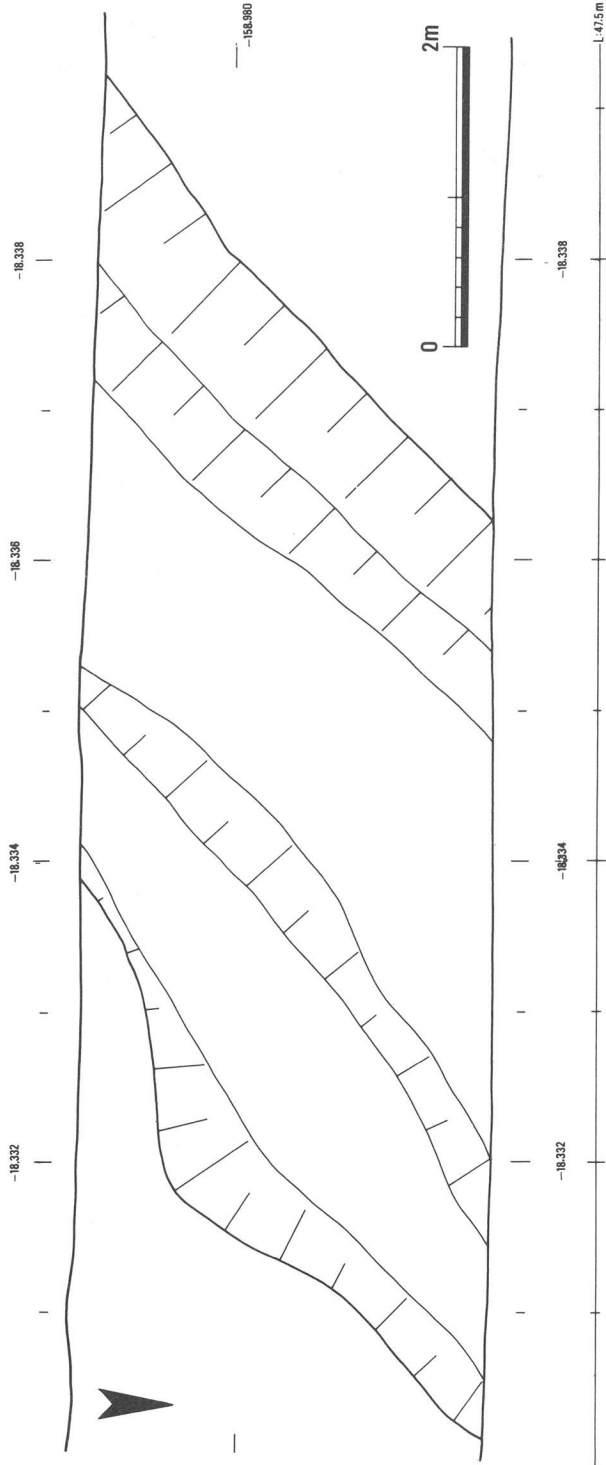
SD-02の西隣りで確認された弥生時代前期溝である。淡灰褐色砂層から掘削され、南西から北東方向に軸をとる。幅2.4m、深さ0.5mを計る。堆積は単純であり、溝内から前期壺上半部が検出されている。SD-02に南東端を切られている。

SD-04

本溝はSD-02の東4mに掘削された幅3.6m、深0.9mの溝である。この溝は弥生時代以前に



第5図 SD-04溝遺構平面図及び断面図(1/50)



SD-05 階層層序：庄内期溝上層 7
 中層 8, 9
 後期溝 16~21
 中期溝上層 23
 最下層 13

- 1. 耕土
- 2. 粘土
- 3. 灰褐色粘質土
- 4. 茶褐色土
- 5. 明茶褐色粘質土
- 6. 暗茶褐色粘質土
- 7. 粗灰色粘砂土
- 8. 暗茶褐色粘砂土
- 9. 黑色粘砂土
- 10. 暗茶褐色土
- 11. 暗茶褐色粘砂土
- 12. 黑褐色粘質土
- 13. 18, 23, 29. 黑色粘土
- 14. 暗茶褐色粘質土
- 15. 暗灰色粘質土
- 16. 暗茶褐色土
- 17. 粗灰色粘砂土
- 18. 暗茶褐色粘砂土
- 19. 黑褐色粘質土
- 20. 灰褐色粘質土
- 21. 灰褐色粘質土
- 22. 暗灰色粘質土
- 23. 後期溝上層 23
- 24. 暗黃褐色粘砂土
- 25. 黑褐色粘質土
- 26. 暗灰色粘質土
- 27. 暗茶褐色粘質土
- 28. 暗茶褐色粘質土
- 29. 暗灰色粘砂土

第 6 圖 SD-05 中期溝遺構平面圖及 U 断面圖 (1/50)

流れていたと思われる河道の一部を切って南南西から北北東方向に走行するものである。溝の断面形態は逆台形を呈するが、東肩は比較的ゆるやかな傾斜をもっている。埋土は三層に大別でき、いずれも粘土層である。下層の黒色粘土層（第14層）からは第Ⅴ様式初頭の土器とともに槽や鋤などの木製品が出土した。また、上層の第6～8層には多量の完形土器が幅1mにわたり列をなした状態で検出された。単なる溝内における土器廃棄ではなく、溝埋没の最終段階に意識的におこなわれたように思われる。土器列の時期は第Ⅴ様式後葉で甕が多い傾向を示している。

S D—05

前述S D—04の東6mにおいて検出された大溝である。本溝は遺構面と土層観察より3条の溝（1, 第Ⅳ様式. 2, 第Ⅴ様式. 3, 庄内式）が切りあっていることを確認した。最初の溝は灰黄色微砂層をベースとして掘削されており、溝幅3.7m、深さ1.2mを計る。溝の形態は東側に幅0.5mのテラスをもち、二段掘りになっているが西側にはみられない。南西から北東に走行する溝である。本溝の堆積土は大きく二層（第23層・第29層）に分層され、いずれも粘土層であるが、東側テラス付近では砂質土の堆積がみられた。下層（第29層）においては第Ⅳ様式末の土器とともに大形石庖丁1点、石庖丁7点、他に獣骨、板材などを検出した。

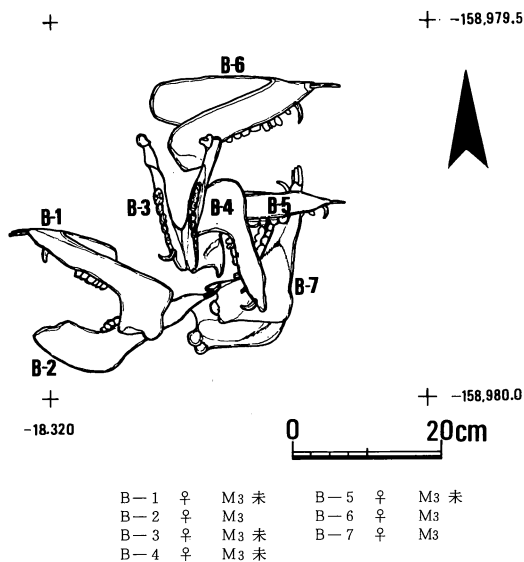
弥生時代後期の溝は明茶褐色粘質土をベースに南西から北東方向に走行する溝である。推定幅3.2m、深さ0.8mを計り、断面はU字を呈する。溝内堆積は後述する庄内期の溝によって切られており、溝底と東肩付近のみ埋土がみられた。西肩部分は切られているが、庄内期の溝とほぼ同じ付近でたち上がると思われる。第Ⅴ様式の中頃の土器が出土している。

次に庄内期の溝は前述後期溝と同じ遺構面で検出された。溝幅2.7m、深さ0.5mを計る。南西から北東に走る溝である。溝内堆積は大きく四分層でき、最下層（第13層）、下層（第12層）、中層（第8、9層）、上層（第7層）となる。中層、上層は粘砂土でこの層より完形品を含む多量の土器を検出した。土器群は中層から上層にかけて累積した状態で時間的に短い廃棄と考えられる。

S D—06

本溝はS D—05の東2.6mにおいて検出された大溝で弥生中期に掘削され、後期に再掘削されている。中期の溝は幅約10.5m、深さ1.6mにもおよぶ大規模な溝である。溝の断面形態はほぼ平坦なテラスを東側で二段、西側では一段を有しながら溝中央のやや西寄りに浅いU字溝を呈するものである。ただ、西肩付近ではこのテラスを切るようにV字溝が走り、本溝埋没の一過程で西寄りに溝が移動したと土層の断面観察より着取された。本溝の堆積は四層に大別できると思われ、初期の堆積は東肩のテラスに堆積した最下層の黒色粘土層（第32・33層）、さらにこの粘土層を肩にしながら溝中央に堆積した下層の黒色粘土層（第25～31層）がある。この最下層、下層の堆積を覆うように粗砂層、細砂層など砂を主体とする層で中層が形成されている。この段階で溝はほぼ埋没した状態を呈すが、溝西側においてV字溝を掘って機能を果していたと思われる。

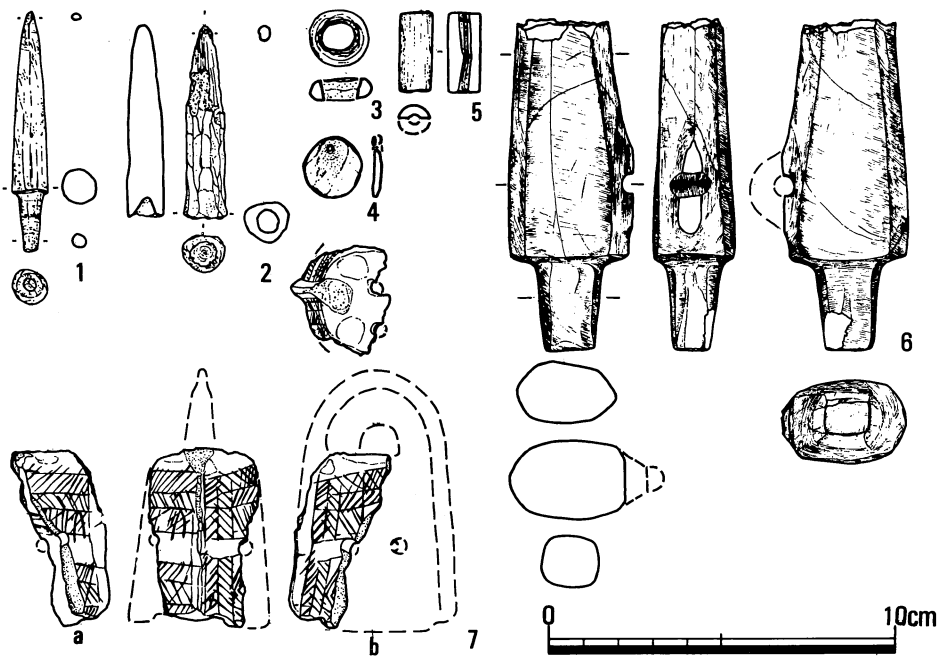
最下層の黒色粘土層においては若干のⅠ・Ⅱ様式の土器を混在しながらも第Ⅲ様式がその主体である。この層より鐸形土製品、イノシシの下顎骨7体分、鹿角製鏃などが出土した。下層の黒



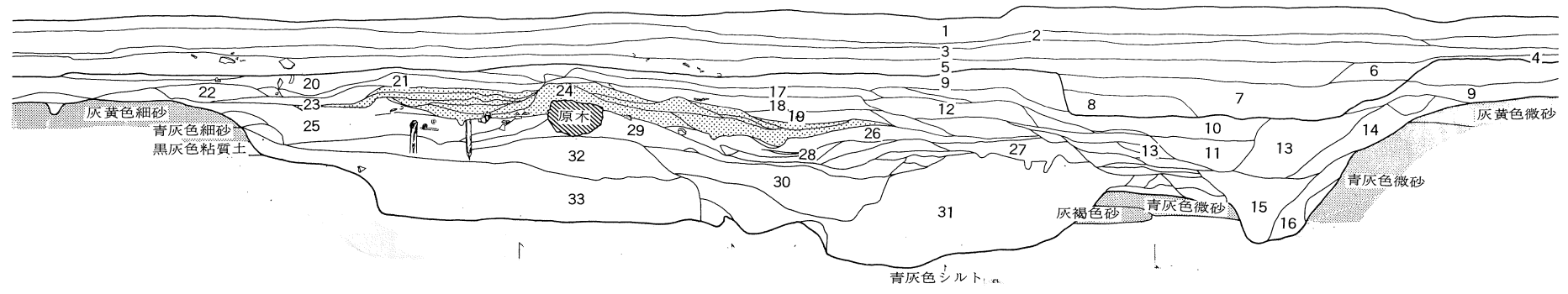
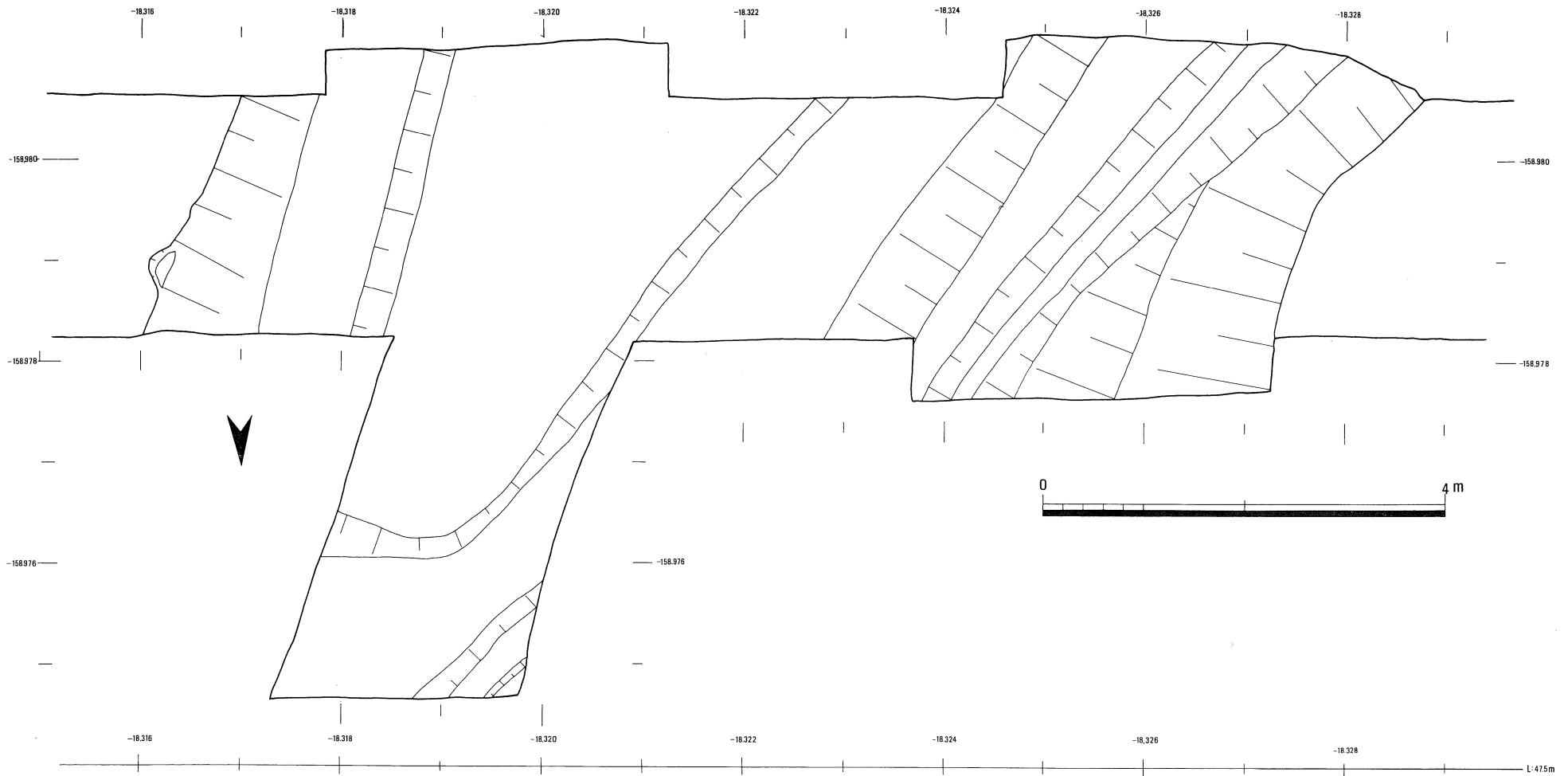
第8図 SD-06中期溝イノシシ出土状態平面図(1/50)

これらと混在する状態で土器や丹塗板、紡織具、かぎ状木器、木製高杯などの木製品、管玉、鹿角製鏃が出土した。これらの遺物は砂質土と混在しており、第IV様式中葉と思われる。また、この

色粘土層では凹線文を含んでおり、第IV様式に属すると思われる。この層より武器形石器が出土した。本溝の東寄り付近の下層上面において長さ5.5m以上、最大直径55cmのケヤキ原木が溝に並行するように出土した。原木は根元を北に、先端を南にむけておりほぼ水平におかれていた。原木の先端は調査区域外で検出していない。この原木は西側に約1mの枝を残しており、先端には加工痕がみられた。また、北側の根元付近や枝と幹の分かれ目には杭がうたれており、この原木を溝中に貯木していたと考えられる。この原木の周辺からは原木の枝片かと思われるものや自然木が多く出土しており、



第9図 SD-06中期溝(1~3, 5~7)、同後期溝(4)出土遺物(1/2)



S D-06南壁層序：後期溝 6～8・中期溝上層 10～23・中期溝中層 24
 中期溝下層 25～31・中期溝最下層 32・33

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|----------|
| 1. 耕土 | 11. 暗灰色粘質土 | 21. 暗灰褐色砂質土 | 31. 黒色粘土 |
| 2. 床土 | 12. 淡灰褐色粘砂 | 22. 黒色粘土 | 32. 黒色粘土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 13. 黒色粘土 | 23. 灰黒色粘質土 | 33. 黒色粘土 |
| 4. 茶褐色土 | 14. 黒色粘土 | 24. 粗砂・砂質土層 | |
| 5. 暗茶褐色土 | 15. 黒色粘土 | 25. 黒色粘土 | |
| 6. 茶褐色粘質土 | 16. 黒色粘土 | 26. 淡茶灰色粘質土 | |
| 7. 暗茶灰色粘質土 | 17. 暗茶灰色粘質土 | 27. 淡灰褐色粗砂 | |
| 8. 暗灰褐色粘質土 | 18. 黒灰色粘質土 | 28. 暗灰色粘土 | |
| 9. 茶灰色粘質土 | 19. 黒褐色粘質土 | 29. 黒色粘土 | |
| 10. 暗灰色粘質土 | 20. 暗灰褐色砂質土 | 30. 暗茶灰色粘質土 | |

第7図 S D-06中期溝遺構平面図及び断面図(1/60)

中層の粗砂層より完形の石庖丁4点がまとまって検出された。本溝の西側におけるV字溝では黒色粘土が堆積しており第Ⅳ様式でも中葉から末にかけてのものである。

この中期溝が埋没した後、第Ⅴ様式中頃には明茶褐色粘質土をベースに再び掘削されている。規模は溝幅3.8m、深さ0.5mを計り、南南西から北北東に走行する。溝の断面形態は逆台形を呈す。

S D—07. 08. 09

S D—07及びS D—08はS D—06中期溝埋没後に形成された小溝で幅0.5m、深さ0.1m前後のもので自然流路的なものと思われる。時期は第Ⅳ様式である。

S D—09は幅1m、深さ0.3mのU字溝で南東から北西方向に走行する小溝である。中期中頃の溝と思われ、S D—06と北側で合流する可能性がある。

(3). 土坑

土坑は総数10基で、その大半はトレンチ東端で検出したものである。S D—06より東側付近より居住空間になると思われる。

S K—03. 05

S K—03はS D—06中期溝埋没後に掘削された弥生時代後期の土坑である。径約1.4m、深さ1.4mを計る。二段掘りがなされており、円筒形を呈す。本土坑は黒色粘土によって堆積しているが、最下層より完形の広口壺1点が出土した。時期は第Ⅴ様式後葉である。

S K—05はS K—03の東4mにおいて検出された土坑である。土坑の形態は径0.8mの円形プランで深さ0.6mを計る。本土坑の堆積は大きく三層に分層され、いずれも黒色粘土層である。上層より完形品を含む土器6点が検出された。長頸壺と甕のセットで第Ⅴ様式中葉に位置づけられよう。

S K—07

トレンチ北東部、S D—06の東約1.5mで検出された土坑である。本土坑の半分は調査区外に広がっている。黄褐色粗砂層より掘り込まれており、平面形態は推定楕円で、断面形態は西側にテラスをもつ逆台形を呈していると思われる。規模は検出部で最大径2.1mを計る。激しい湧水のため完掘しえなかった。堆積土は検出した深度までにおいて三大別され、上層（黒色粘土）、中層（灰色粗砂）、下層（黒色粘土）である。

出土遺物は上層から完形高杯3個体、中層からは木庖丁が検出されている。土坑の性格は井戸と推定され、上層から出土した完形高杯群は井戸廃棄の際に供献されたものと考えられる。なお土坑南肩から検出した人骨（成人鎖骨～尺骨）は、精査したにもかかわらず土坑墓の存在を指摘できなかった。また本遺構に伴うとも確定しえなかった。

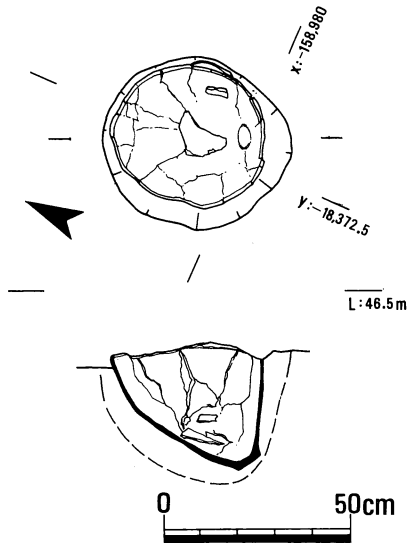
S K—10

本土坑はS D—06中期溝埋没後に掘削された土坑で、北拡張区の北端で検出した。土坑の約半分は調査区域外のため、その規模については明らかにしえないが、推定1.2mの円形プランであ

る。坑底ちかくでは袋状を呈す。深さ1.5mを計る。最下層より壺3点、小形鉢1点の完形品を検出した。時期は庄内Ⅱ式と考えられる。

S X—01

S D—01中期溝埋没後につくられた甕棺墓である。上面は中世の削平をうけ、欠失しているが、棺内部底に甕口縁部と蓋に転用したと思われる壺胴部の破片がおちこんでいた。骨は検出されていない。棺の主軸方向はN—24°—Wで、埋置角度は62°である。



第10図 S X—01甕棺墓(1/20)

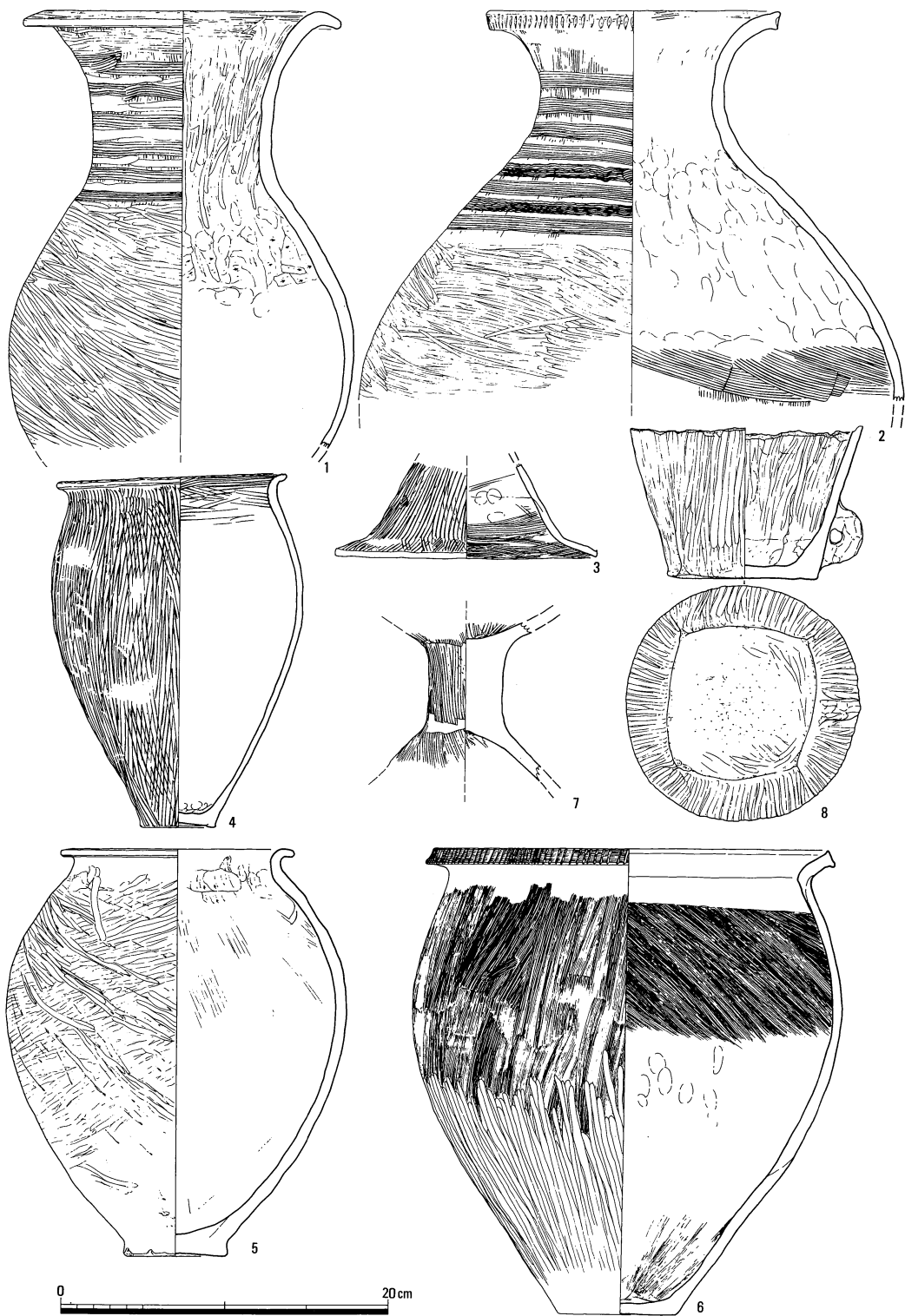
3. 遺物

今回出土した遺物は土器、石器、木器、骨角製品や獣骨、自然遺物など多種類に及び、その量も多い。ここではこれらすべての遺物について説明できないので、若干、注意をひく遺物を中心に報告することにする。

(1). 土器

S D—06中期溝出土土器 (第11図)

1～7は最下層(第32層)、8は下層(第25層)出土である。1.2は壺である。1は体部の張りがなく、頸部から体部へのくびれ部は不明瞭である。体部は全体に丁寧なミガキで、頸部には楡描直線文が施され、その間にはミガキによる暗文がみられる。内面にはわずかにケズリがおこなわれている。2の壺は1と同様の外面調整であるが、文様には波状文が加わっている。文様間の暗文はみられない。内面は煤が付着しており、口縁内面は使用のためか摩滅している。3.4は甕とその蓋である。4は大和型甕で、底部を除く外面全体及び体部上半の内面には煤や炭化物が付着している。器壁は薄く、口縁部や体部には粗いハケを残している。これと同様の調整は3の蓋にもみられ、裾縁辺部の内面には煤の付着があり、大和型甕とこの蓋はセットになると考えられる。5.6は中形の甕になるが、5の甕は口頸部のしまった厚手の甕である。外面は下から上方向へ粗いケズリをおこない、左及び右斜め方向からのミガキ調整を施し、ケズリを削している。内面は細密なハケとナデによる調整がみられる。6は体部上半が張り、口頸部も「く」の字状に折れ曲がる。端部は不明瞭ながらハネ上げ口縁を呈し、楡描烈点文を施している。内外面とも細かいハケがみられ、体部下半外面にはミガキが施されている。5.6の甕には火熱の痕跡はみられない。7は高杯脚部で、脚部が中空か中実かは不明。外面には粗いハケがみられ、杯部内面にはミガキが施されている。8は把手付鉢である。上端部は打ち欠き、面をそろえて再成形している。底部は側辺がふくらみ気味の四角形につくられており、また、把手が底部近くに付く特殊な形態から当初より特別な器形として製作されたと思われる。内面にはわずかに赤色塗彩がみられる。内外面ともミガキ



第11图 SD—06中期沟出土土器 (1/4)

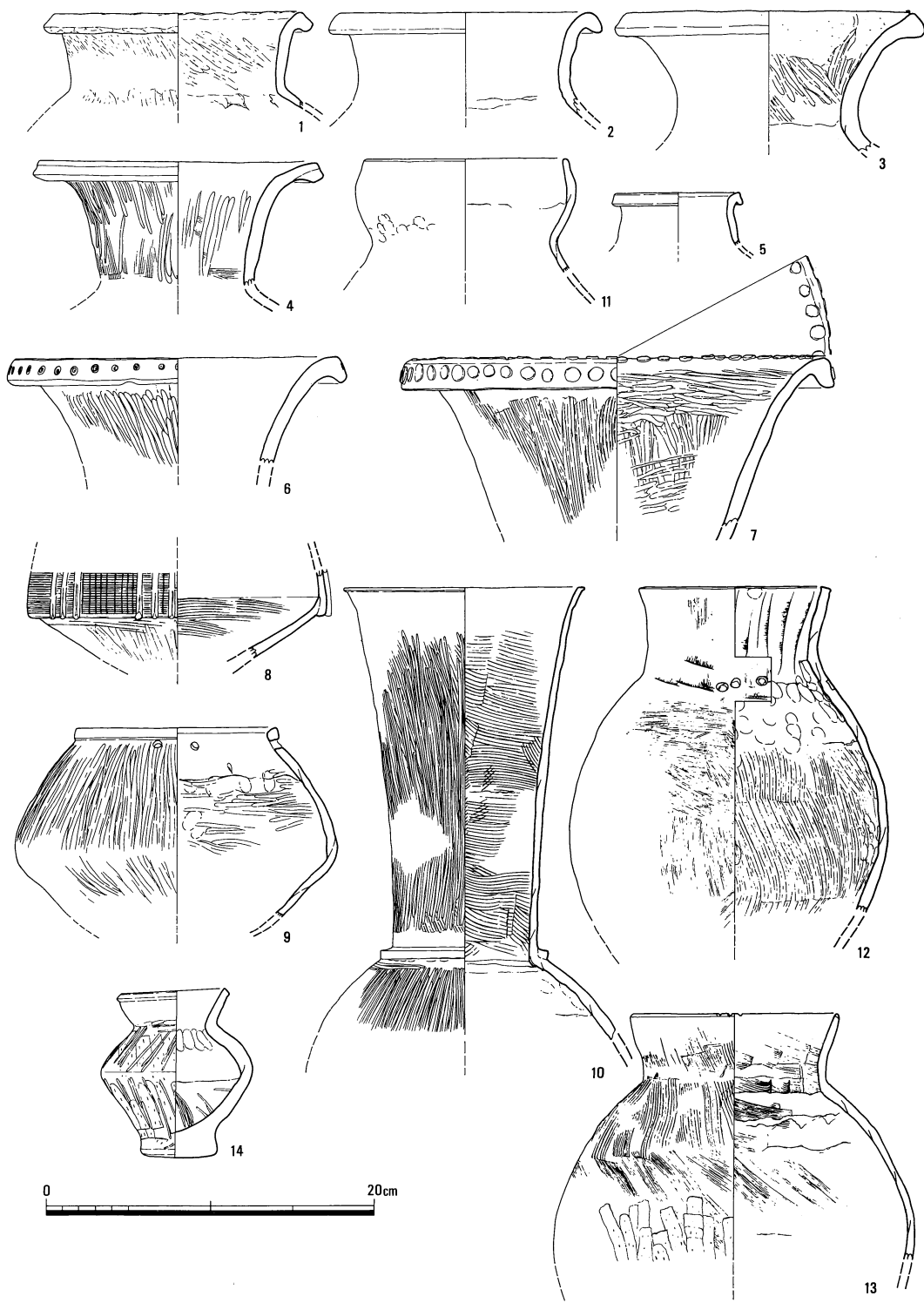
調整で底部中央は使用による摩滅がみられる。

S D—05中期溝出土土器（第12～14図）

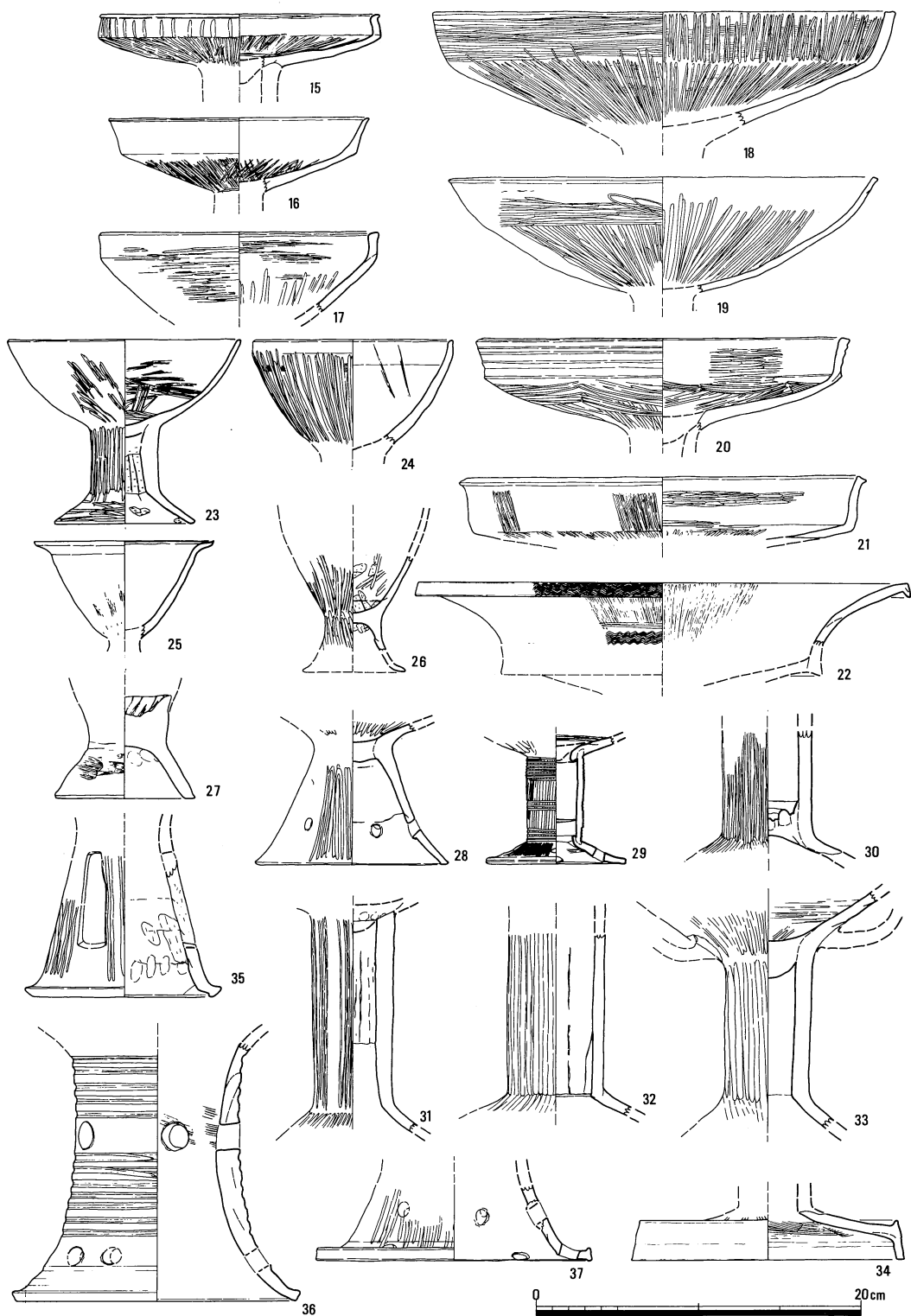
1～53の土器はS D—05中期溝下層（第29層）出土の一括資料である。1～4、6、7は広口壺である。これらの土器は口縁部を肥厚あるいは垂下させるもので、6の口縁端面には円形刺突と竹管を組み合わせたものや7のように円形浮文を貼付したものもある。形態的には頸部と体部に明瞭な屈曲をもつものとなだらかになる二種がみられる。調整においては1、2のようにナデ調整で仕上げるものもある。1の体部上半や頸部内面にはケズリの痕跡がみられる。8、9は無頸壺である。8は簾状文を施した後、棒状浮文を貼り付けており、胎土や形態から中河内産と思われる。9は口縁部がわずかに上方へ突出肥厚するもので内外面ともにミガキがみられる。10は大形の長頸壺である。口縁部は面をもち鋭い。頸部と体部の境には貼り付け突帯がみられる。体部は中位より下で胴が張る形態と思われる。外面は丁寧な細いミガキで頸部内面には横方向の断続ハケがみられる。11～13は短頸壺である。11は内湾する口頸部をもち、内・外面ともナデ。12、13はハケ調整をおこなうが、13の体部下半にはケズリがみられる。14は小形壺で外面はケズリ後にミガキを施している。15～34は高杯である。高杯の杯部は非常にバラエティに富んでいるが、大きく皿形と椀形の二種である。皿形杯部においてもその立ち上がり部は短く内方するもの(15)や外方へ広がるもの(16)、直立気味に立ち上がるもの(20)などがあり、統一傾向はみられない。15、21には立ち上がり部に局部的なミガキがみられる。18、19、20では外面に横位のミガキが施されている。20には退化した4条の凹線がみられる。22は独特の形態を有していると思われ、皿形杯部で外方へ大きく広がる立ち上がり部を有し、口縁部とその下方に精緻な櫛描波状文を施したものである。内外面とも丁寧な細いミガキがみられる。高杯脚部において柱状のものが多いが、33では杯部に縦方向の把手が付くもので剥離痕がみられる。34は脚端部が上方へ立ち上がるもので柱状の脚部が付くと思われる。28、31は局部的なミガキがみられる。35～37は小形の器台である。35は長方形の透孔、36は下段に2個一対の円形穿たれている。36はヘラによる退化凹線がみられる。38～48は甕である。大・中・小の各種ある。38は大形甕で頸部が小さく、口縁部上方に立ち上がる。外面は体部中位に左上がりのタタキ、上半に右上がりのタタキがみられ、ハケをもって消している。内面はケズリである。内面のケズリは39、40、44～48の甕にみられ、一般的である。46、47のように体部下半の外面にもケズリを施しているものもある。他のものは外面をハケあるいはナデで仕上げている。41は口頸部と体部のくびれが不明瞭で口縁端部も整っていない。外面は器壁をけずるようなハケがみられる。49～53は鉢である。49は把手付鉢で内外面ともミガキ。50～52は形態的に類似しているが口縁部のつくりの違いがみられる。52は底部に一孔穿っている。50には体部下半にケズリがみられる。53は大形鉢で口縁部は折り曲げ垂下させている。内外面ともミガキ調整である。

S D—05庄内期溝出土土器（第15図）

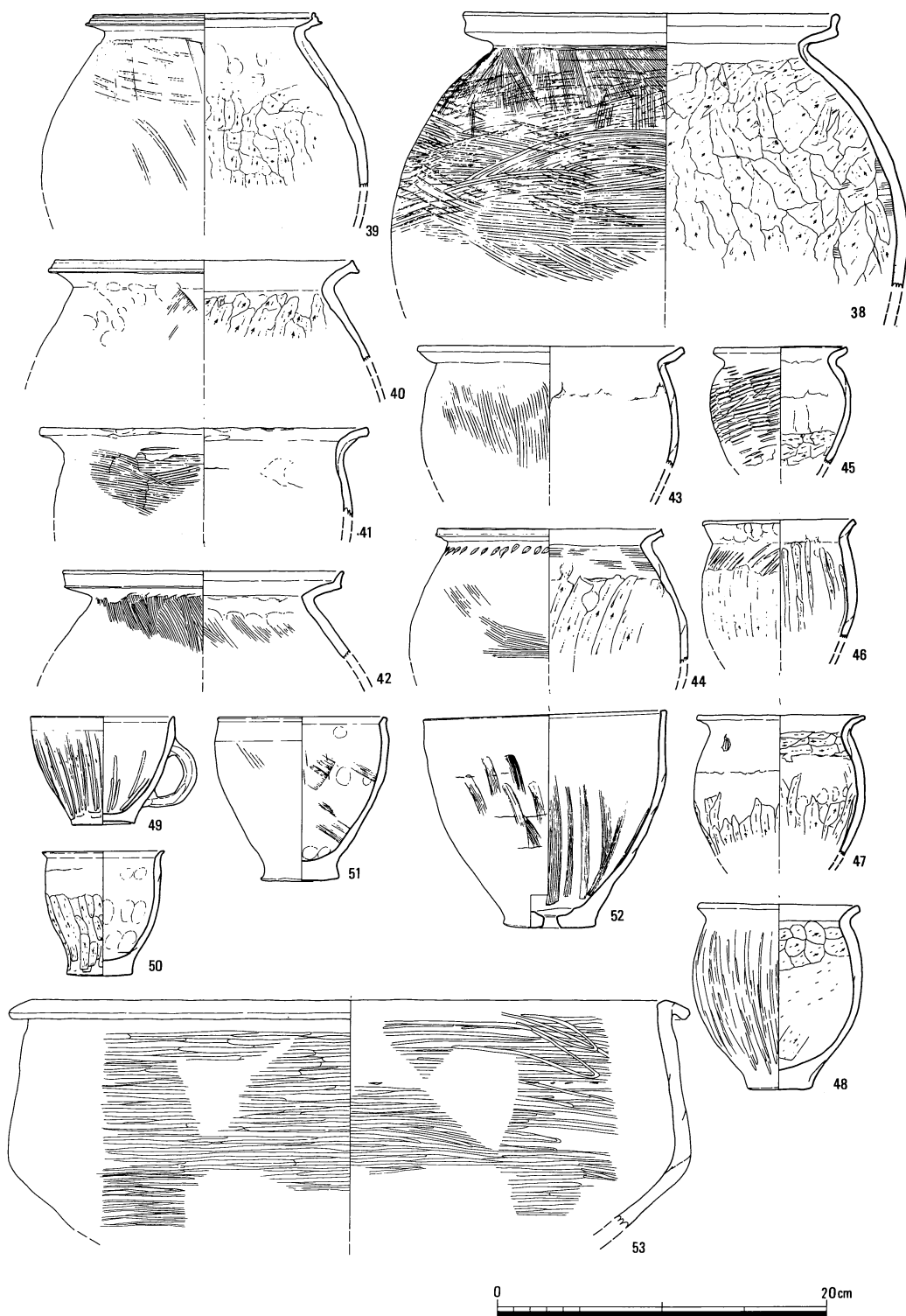
1～16の土器はS D—05庄内期溝上層（第7層）より出土した土器の一括品である。1～3は壺である。1は小形の丸底壺で外面体部下半にケズリがある他、調整不明。2は底部にケズリが



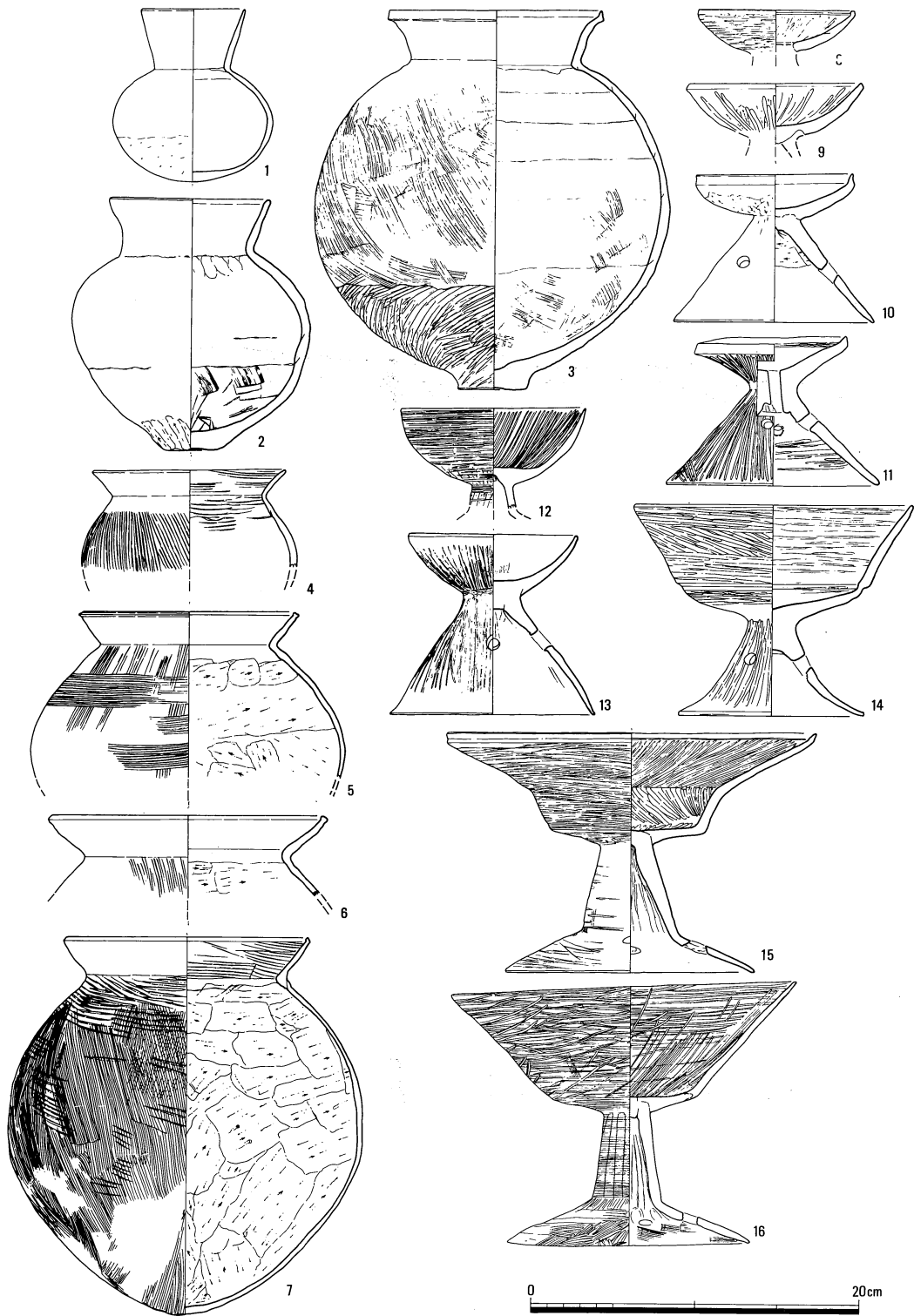
第12图 S D—05中期溝出土土器(1)(1/4)



第13图 S D—05中期溝出土土器(2) (1/4)



第14图 SD-05中期沟出土土器(3)(1/4)



第15图 S D—05庄内期溝出土土器(1/4)

おこなわれているが全体はナデ調整である。3は大形で体部下半は右上がりのタタキがみられ、上半ではハケ調整がおこなわれている。口縁端部は上方に鋭く突出する。4～7は甕で内外面ともにハケ調整がみられる。5、6は外面をハケ調整、内面はケズリをおこなっているが、口縁端部においては5は内外に若干肥厚させ、6では口縁部はやや内湾気味で内側への肥厚がみられる。7においては内方へ鋭く突出している。底部はわずかに平底を有している。外面はタタキをハケで削しており、内面はケズリである。8～11、13は器台で口縁端部はバラエティに富んでいる。8～9、13には受部外面にケズリ痕がみられる。11は有孔である。12、15、16は高杯である。12は小形で杯部外面にケズリ痕がみられるが、全体に丁寧なミガキ調整をおこなっている。15は杯部に段をもつもので口縁端部は上方へ鋭く突出している。15、16ともに丁寧なミガキ調整である。

異形高杯（第3図）

杯部が独特の形態を有するもので、一見耳杯をおもわせるものである。杯部の形態は長楕円形を呈し、その長軸の両端に三角形の透かしと山形の突出二つが組み合わさったものである。この山形の部分には櫛描文をこれら山形と三角形の透かしの輪郭をうまく利用して特殊な文様構成で描いている。他の部分においてはミガキが施され、また、部分的であるが脚部外面、杯部は文様を除く杯の立ち上がり部に赤色塗彩がみられる。内面では杯中央部と縁辺部にみられる。透孔は四方に縦4列の円孔を穿っている。器高18.0cm、杯部長軸径20.7cm、杯部短軸径15.8cmである。本土器は第Ⅳ様式中葉から末の間でとらえられるであろう。SD-02中期溝下層出土。

(2)石器・骨角器

石庖丁（第16図-1～4）

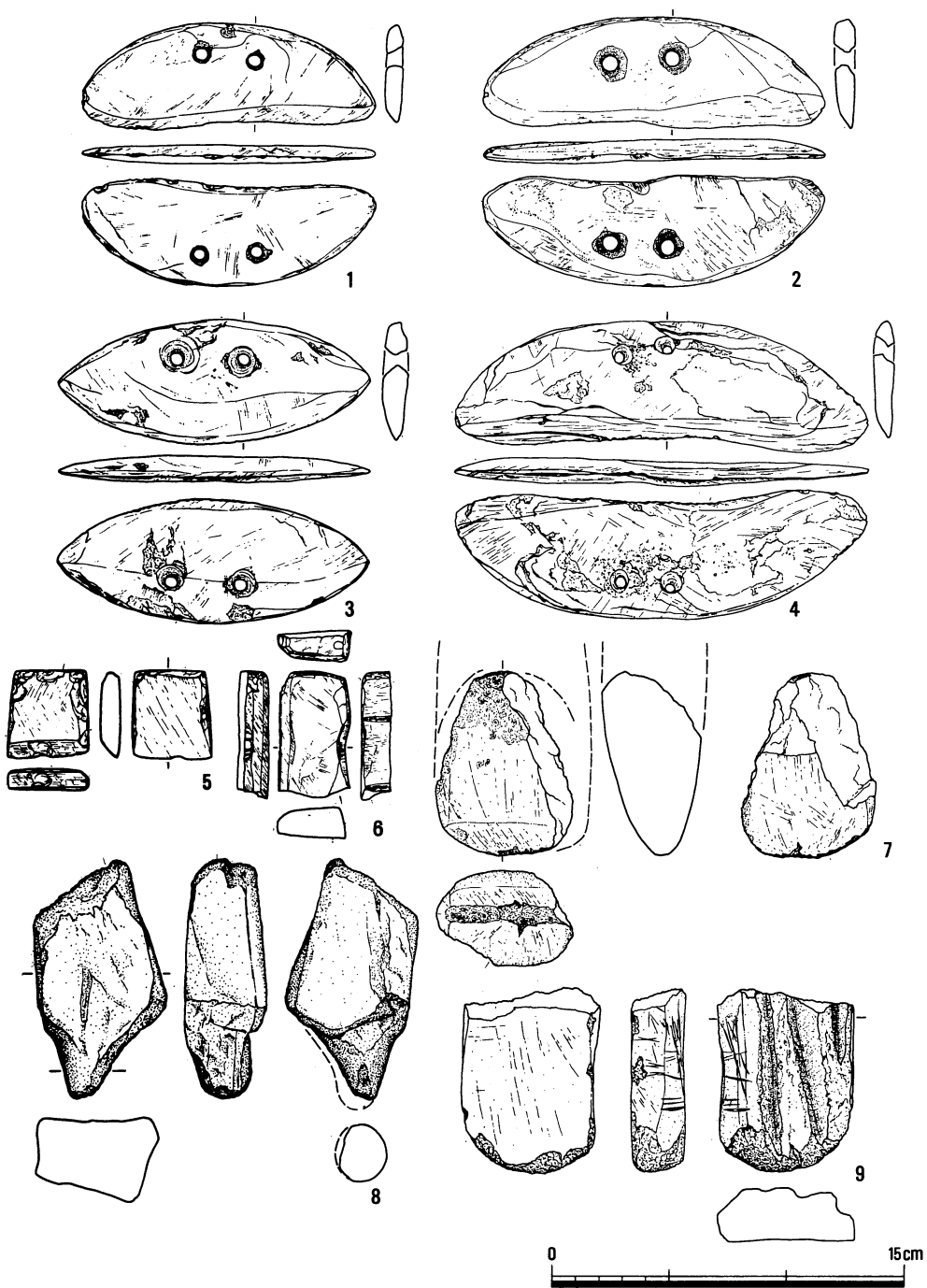
1～4はSD-06中期溝中層より一括出土した。3が杏葉形を呈するほかは直刃半月形を呈している。すべて片刃であり、刃部正面から背面方向への欠損が観察される。また、刃部背面の欠損部を砥ぎなおしたのものもある。穿孔方法は成形段階に敲打をおこない、その後ドリルを使用しているものが多い。なお、1～3では孔縁上端に摩滅が認められる。1～4は玄武岩質凝灰岩である。

石斧（第16図-5～7）

5はSD-02中期溝下層、6・7はSD-06中期溝下層出土である。7は太型蛤刃石斧の残欠である。石斧が半折した後、ハンマーに転用されており、現存の上端と刃部に敲打痕が観察される。5は流紋岩質溶結凝灰岩、6は細粒の石英質砂岩、7は流紋岩質凝灰岩である。

その他の石器（第16図-8、9）

8、9は各々SD-06中期溝下層、中層から出土している。8は環状石斧の穿孔用錐と推定される。半折した断面長方形の砥石を転用したものと考えられ、穿孔機能を果す円柱部の先端と側辺を欠損している。9は玉砥石を転用したハンマーである。正面にはほぼ平行して走る断面U字形の研磨3条が観察される。また正面左側部の研磨面には刀子痕様の鋭い条痕が多数認められる。半折後、ハンマーに転用されており図下端に多数の敲打痕が観察される。8は細粒の弱片麻状黒雲母花崗岩、9は砂岩ホルンフェルスである。



第16图 SD-02中期溝(5)、SD-06中期溝(1~4、6~9)出土石器(1/3)

骨角製品（第9図—1～3）

すべてSD—06中期溝出土遺物である。1は最下層、2は中層、3は上層から出土した。

1、2は鹿角製鏃である。1は丁寧に研磨して仕上げられており、刀子痕をほとんど残さない。鏃身下半から先端にかけては縦方向に、先端は横方向に擦痕が観察される。中径は全体に横方向に研磨されているが、中央部に圧痕様のものが観察される。2は鏃身上半部の遺存状態が悪いが、鹿角の先端部を利用して製作されている。刀子痕は鏃身下半部にのみ認められ、研磨痕は観察できない。基部には円錐形の孔を穿ち、着装に備えている。また鏃身全体に黒色の物質が薄く付着している。

3は骨製リングである。外面、孔とも刀子によって形態を作り出した後、外面上半のみ丁寧に研磨がおこなわれている。

石製装飾品（第9図—4、5）

4はSD—06後期溝（第7層）、5はSD—06中期溝下層から出土している。

4は石製垂飾品である。玄武岩質凝灰岩を使用しており、背面及び側面に研磨痕が観察される。穿孔は両面からおこなわれている。

5は管玉である。泥岩製であり、縦方向に半損している。孔は両小口からやや斜めに穿孔され、中央で結合している。外面は長軸方向の擦痕が観察される。

(3)木製品

当調査においても多量の木製品が出土したがその大半は溝出土資料であり、特にSD—02、SD—06出土の木製品には量、質ともに目を見張るものがある。その領域は農具、工具、容器、紡織具、日常雑器、祭器等多岐におよぶ。ここではその中から特に目を引いた遺物のうち一部をとり上げ解説をおこなう。

農耕具（第17図）

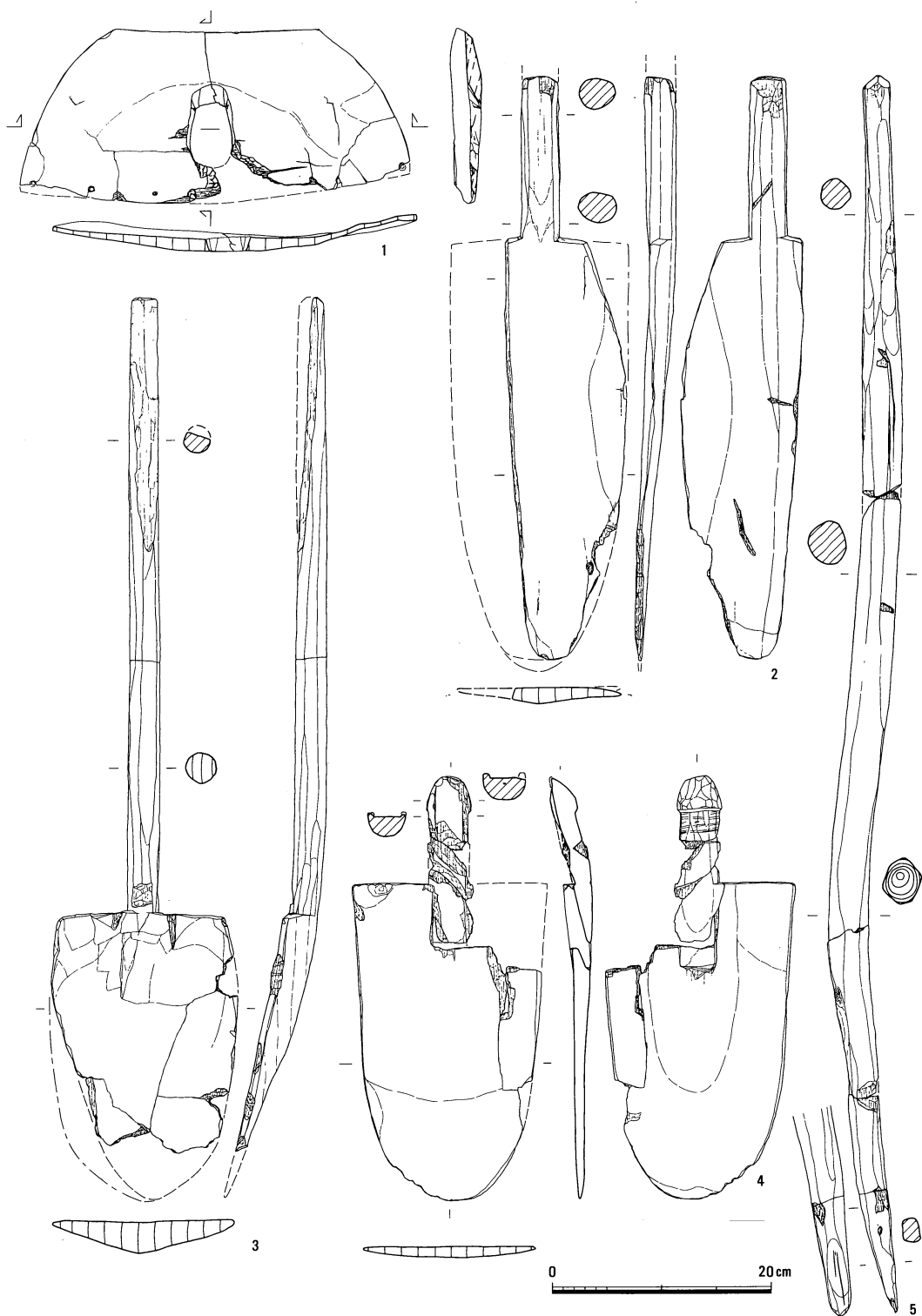
1はSD—06中期溝中層（第24層）、3は同下層（第31層）、2、4、5はSD—02中期溝下層（第22層）から出土した。1はえぶりである。現存長15.7cm、幅35.7cmを計り、台形状を呈す。土圧によりやや変形しているが、本来は身表が内湾する。刃縁部に補修痕と推される小円孔をほぼ等間隔に穿っており、丸鍬の転用品と考えられる。推定着柄角は95°。裏面に加工痕を明瞭に残す。柄孔周縁部に焼痕が見られるが、加工に伴うものではない。カシ材を用いる。2～4は鋤であるが、いずれも形態を異にする。2は身部長38.8cmを計る。本来は身基部に明瞭な肩を有していたと推されるが、すでに欠失しており、また刃部の磨耗状況からみて、身部半折後も継続使用していたと推される。身部は身表へ若干の反りをもつ。3は現存長77.9cm、身部長22.1cm、身幅17.0cmを計る。身部はスコップ状を呈し柄に対して約10°の角度をもつ。身厚も厚い。柄長は56.8cmを計り、先端部には面取り加工を施す。2、3が長柄型であるのに対し、4は着柄型である。全長38.9cm、身部長29.0cm、身幅17.7cmを計る。刃部は身表に大きく屈曲する。着柄軸はやや長めに作り出し、中央部に縄縛の為の「コ」の字状の溝を設けており、縄縛によると思われる擦痕を残す。着柄軸か

ら身部にかけて幅2.5cm程の着柄溝を設け、身部において裏面に貫通する。2、3、4はともにカシ材である。5は着柄鋤の柄と思われる。柄は鋤身との接合部に表裏2面から先端方向へ削りを加え、柄の固定を補促する。握部は上方に向かってゆるく湾曲している。全長113.3cmを計る。4と5は同一層内で近接して出土しており、本来セットで使用されていた可能性が大きい。

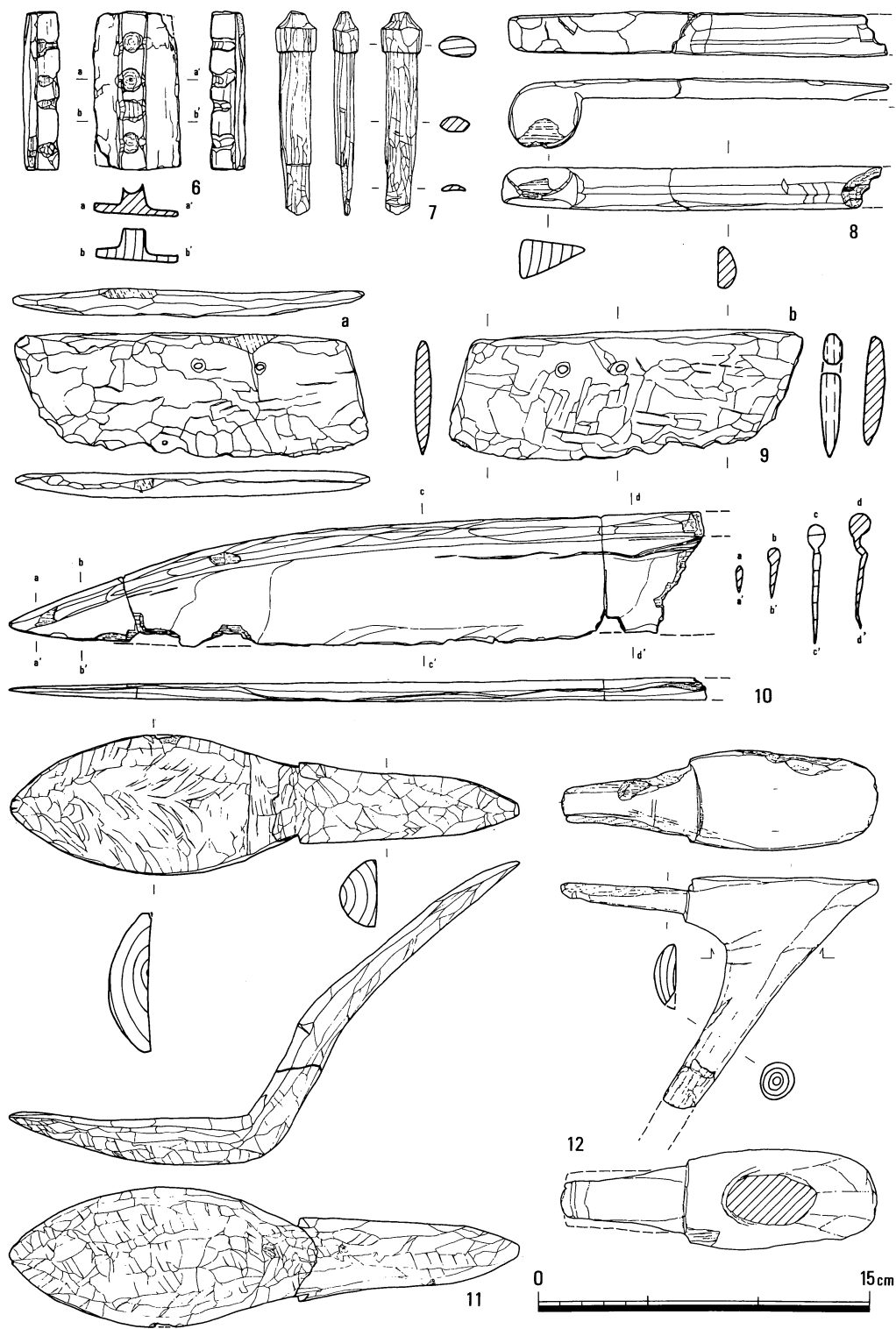
生活用具、その他（第18図、図版11）

第18図6、7、10、11はSD—02中期溝下層（第22層）、8はSD—06中期溝下層（第31層）、12は同中層（第31層）、9はSK—07中層より出土した。6は火鑽板である。全長7.2cm、幅3.9cm、厚さ1.6cmを計る完形品である。断面T字状をなす精製品であり、頂部三カ所に円形の凹みを残し、凹み両側縁に火種を落とした溝も認められる。9は木庖丁である。全長11.0cm、幅5.6cm、厚さ1.1cm。刃部の所々に使用による磨滅痕がみられ、2個の紐通し孔には紐ずれと思われる擦痕が観察された。カシの征目材を平行四辺形状に裁断する。11は匙の半製品である。全長23.1cm、身幅6.4cmを計る。身は柄に対し53°の角度を有す。身部はまだ削り込まれていない。柄先端部下10.0cmから、身部に向かって両側縁からL字状の抉りを設けている。材質はカシで樹芯が身部から柄部にかけて貫通する。器表には加工痕が鮮明に残る。12は扁平片刃石斧の柄である。柄部大半を欠失しており、台部長14.3cm、着装部長6.3cm、幅4.5cm、着柄角度は68°を計る。着装部基部には使用時の衝撃痕と思われる断面V字形の凹みを残す。7、8、10は用途不明である。7は全長9.3cm、断面楕円形状を呈し、一端には乳頭状の削り出し部を、他端には長さ2.3cmの断面L字状の切り込みを施す。8は現存長17.3cm、一端を欠失しており、他端には断面三角形の円形突出部を設け、その背部にわずかながら焼痕を残す。10は一端を欠失している。一方の側縁部には断面円形状の隆起帯削り出し、他方は刃状に薄く削り出す。カシ材を用いる。第1次調査においても同形の木製品が検出されており、紡織具と考えられているが、大きさが第1次調査時のものより一回り小さく、樹種にも相違が認められ明瞭な使用痕は観察されなかった。現存長31.6cm、幅5.7cm、最大厚1.1cmを計る。

図版11—9はかぎ状木製品である。全長42cm、柄部巾3.8cm、かぎ部幅10cm、厚さ3.0cmを計る。断面長方形を呈し、表裏外縁部及び柄部内縁部に刻みを施す。柄部先端部下に径1.4cmの円孔を穿ち、円孔下16.5cmにわたって幅2.5cmの複合鋸歯文を焼き刻む。かぎ部先端部外縁に長さ5.8cmのL字状の切り込みを施す。図版11-10、11は丹塗板である。ともに一端を欠失しており、現存長は10が55cm、11が44cmである。両者とも表裏両面に赤色顔料を施し、木理に直交して、横方向にほぼ1cm間隔の連続した紐通孔を6.3~7.0cm幅で穿っている。針葉樹材を用いる。図版11—7は紡織具である。現存長54cm。両端に細い握部を設ける。中央板部は断面三角状を呈し幅5.0cm、厚さ1.8cmを計る。背部に深さ1.5cmの鋭いV字溝を抉り込む。板部両端に連続三角刻目文を木理に直交させながら2条を一带とし、7~8条刻み込んでいる。広葉樹材である。第1次調査時にも同形態の製品が検出されている。かぎ状木製品はSD—06中期溝中層（第24層）、丹塗板10はSD—02中期溝下層（第22層）、11はSD—06中期溝中層（第24層）、紡織具も同層より検出している。



第17图 SD—02中期溝 (2、4、5)、SD—06中期溝 (1、3) 出土木器(1)(1/6)



第18图 SD—02中期溝 (6、7、10、11)、SD—06中期溝 (8、12) SK—07(9)出土木器(2)(1/3)

(4). 鐸形土製品、鞘入り石剣、武器形石器

鐸形土製品 (第9図-7)

SD-06中期溝最下層(第32層)出土である。本品は銅鐸を模したと考えられる土製品で鐸身部分の破片である。鈕は欠損し、鐸身のおよそ半分のみであるが銅鐸の形態的特徴をよく残している。鱗を有し、a・b両面及び舞の部分には型持せ孔が存在する。鐸身の文様はa面では綾杉文を重るた二帯の横帯がみられ、上段の横帯内に「八」字形の記号的なものが描かれている。b面では同じく綾杉文による文様構成であるが、その施文順序は1. 上段上の横帯、2. 縦帯、3. 上段下の横帯、下段の横帯、4. 鐸身中央のミガキによって文様を消すという順序である。内面は上部に粘土掻きとり痕がみられる他ナデ調整である。現高5.1cm、復元高約7.5cmぐらいであろう。胎土は1m以下の石英などの砂粒を含み、当遺跡で作られたものと区別はつかない。色調は暗褐色を呈す。

鞘入り石剣 (第4図)

本遺物はサヌカイト製の石剣が木製鞘に挿入された状態でSD-02中期溝下層内より検出された。石剣はいわゆる打製石槍といわれる形態のものである。剣身の大きさはX線写真による透視で全長約17.0cm、最大幅3.0cm、厚さ1.5cmを計る。鞘に挿入されているため全体にわたる剝離調整は不明である。しかし、基部縁辺部ではトリミングをおこない、鋸歯縁状を呈するのを除き丁寧な調整を施す。また、剣身中央においてもトリミングがみられるが基部ほどの丁寧さはみられない。基部端部には自然面を残している。剣身中央より基部方向にかけて幅0.5cmのサクラの樹皮が約2.8cm巻かれている。これは堅緻に巻かれているため、その巻き方には不明瞭な点があるが基部から先端、さらに基部に戻る巻き方か、先端から基部への一重巻であろう。サクラの樹皮はこの部分のみで基部にはみられない。基部から樹皮の巻き付け部分を含んだ長さは8.9cmである。

一方、木製鞘は2枚合わせの板で、両端に幅0.6cmの溝をつくりサクラの樹皮をもって縛っている。b面には垂下のためと思われる紐通孔が二つ穿たれている。さらに鞘の先端中央にも一孔あけている。板は征目取りで鞘の全長14.6cm、最大幅4.3cm、厚さ2.5cmである。剣と鞘を合わせた全長17.6cmを計る。

武器形石器 (第9図-6)

SD-06中期溝下層出土である。本遺物は砂岩ホルンフェルス製の磨製石器である。基部、身部及び身部側辺の環状耳からなる。身部先端、環状耳及び基部縁辺の一部を欠損する。基部は断面四辺形につくり、磨製石剣の基部に類似する。身部は環状耳側辺部がわずかに反りをもつ。断面は楕円形を呈すがやや環状耳側縁部はやや尖りぎみになる。身部は全体を横位に磨き、その後両側縁部を縦位に磨く。身部中央部にも縦位の擦痕がみられる。環状耳の穿孔も両小口が広がらず、垂直に穴けている。本遺物の調整は全体に丁寧なものである。

4. まとめ

(1)本調査で検出した遺構は既に述べたように大溝と土坑が主である。大溝はその立地状況や規模からムラを圍繞する大溝群と考えられる。大溝群の各々の時期的変遷を明らかにしなければならないが、弥生中期初頭もしくは前期にS D—06が、さらに中期後半にS D—01、S D—02、中期末から後期初頭にかけてS D—05、S D—04が続いて掘削されたと思われる。これら大溝群のS D—01、S D—02、S D—06には第Ⅳ様式中葉の土器を含んだ粗砂層がみられ、今後の砂の分析をまたなければならないが、同一現象による堆積の可能性を有している。これらとともに今までの第一次調査の北砂や第三次調査のS D—06にみられる砂層も同時期であり、当遺跡全体、さらにはその周辺を含めた問題として重要になってくるとと思われる。弥生中期の大溝は後期中葉には再掘削がなされ、5条の大溝が同時期に開口していたと思われる。

(2)ムラの西限の状況については今回の調査では明らかにしえなかったが、調査地西側の水田が当地より30cm低くなり、また、土坑や遺物なども西にいくほど少なくなることからS D—01がムラを囲む外側の溝である可能性はつよい。これに対してS D—06の大溝は最もムラ内部にある溝と考えられる。S D—06は大溝群中最も規模が大きく本溝より東側では土坑や小溝が検出されており、また、その遺物量も最も多いことから居住区が近いことがうかがえる。

(3)S D—03の前期溝についてはその規模や方向、立地状況から環濠としての性格を有しているかどうかは決しがたい。また、S D—05庄内期の溝についてもその性格はムラの状況が把握されていない現段階では判断しがたい。しかし、古墳時代前期においてもムラが継続していることは確実で、今後、ムラの変遷を詳細にとらえていく必要がある。

(4)S D—02中期溝内より注目される一括資料が検出されている。本溝の深み状のところで異形高杯、水差、短頸壺、甕などの土器群、箕、着柄鋤などの農具、匙、容器、丹塗板、火鑽板などの木製品、鞘入り石剣、炭化米、粃穀など良好な一括品を検出した。このようなセット関係を示す類例は弥生時代後期の土坑に散見するが、弥生中期に遡るものは少ない。また、本例は溝内であるが、深み状のところであり、土坑と同様の条件を有していたとも考えられる。これら遺物群の内容から農耕に関わる祭祀遺物としてとらえられると考えている。

(5)土器については多量に出土しており、今後、詳細な報告をしなければならないが、土器編年の上で重要と思われる資料についてはその一部を掲載した。一つはS D—06中期溝最下層出土土器である。壺、大和甕など第Ⅱ様式の様相(胎土、色調、調整)をよくとどめているが、他の器種を含めたセット関係をみるならば、細頸壺がほとんどなく、第Ⅳ様式にみられる壺A、壺Dを共伴していることは注目される。しかし、まだ、水差形土器は含まれていない。甕においては既に体部が張り、口頸部が屈曲している点や端部がハネ上げ口縁化の傾向を示している点は第Ⅱ様式ではとらえられないであろう。本土器群を第Ⅱ様式と第Ⅲ様式の混在とするか、第Ⅲ様式初頭の時期に位置づけられるかは今後、詳細に検討し、類例まちたい。

(6)S D—05中期溝下層出土一括土器も注意をひく資料である。本土器群はいわゆる中期と後期

の両要素を具有するもので一点一点をみるならば、各々の時期に帰属させてしまう恐れがある資料である。しかし、現在、このような要素をもつ土器群の抽出がかなりおこなわれており、本土器群も当時期を考える上で重要な資料となろう。本土器群のセットとしては水差形土器^{注①}を含んでおらず、これの代わりに短頸壺が占め、長頸壺もこの段階でわずかながら出現してくるかも知れない。高杯はバラエティに富んでおり、器形の統一はなされていない。甕や器台においては中・小形品が主となる。高杯の割合がかなり高くなると思われ、壺や甕と同率ぐらいであろうか。調整方法としては短頸壺など厚手の粗雑なものがある一方、長頸壺、高杯など丁寧なミガキを施したものもあり両極端である。ケズリ手法は甕や短頸壺などにみられ、一般的である。ここで遺跡の状況から考えるとS D—01、02、06の溝の埋没が凹線文盛行の時期でS D—05には粗砂層がみられず、その直後の掘削であると思われる。また、本溝の下層では石庖丁などが検出されており、石器の消滅はうかがえない。検出遺構面においても後期前葉から中葉にかけて上昇しており、遺跡自体に大きな変動がみられるようである。このようなことから現段階では第Ⅳ様式の末として本土器群を考えておきたい。

(7) 鞘入り石剣は今回の調査で最も注目すべき遺物である。石剣には樹皮を巻いて把部をつくっている。基部からこの樹皮まで約9cmあり、恩智例も約8.2cmで極めて類似している。今後、把部としての刃部調整を再検討していく必要がある。また、鞘におさめられた状態を保っていたことは類例がなく、武器としての使用のしかたを考える上で重要である。

(8) 鐸形土製品は第Ⅲ様式に属すると考えられるもので鐸形土製品中では古い一例となった。土製品自身も綾杉文での装飾で横帯文を片面に描いていることは古式銅鐸を模していると思われる。当遺跡では二例目でもあり、比較的古い段階より銅鐸を保有していた可能性がでてきた。

(9) 武器形石器は第Ⅳ様式に属する磨製石器であるが、畿内において銅剣形石剣、鉄剣形石剣の例は多いがこのような形態のものは類例のないものになろう。とりわけ、環状耳をもち、明瞭な刃部をもたないことは注目すべきことで今後、矛などの武器の形態から検討していきたい。

以上、簡単に注目されるものについて述べてきたが、この他異形高杯など類例のない、あるいは少ない資料もあり、今後、本報告において詳細におこないたいと考えている。

注①森岡秀人「西ノ辻N式併行土器群の動態—畿内第Ⅳ様式の細分作業と関して」

『森貞次郎博士古稀記念古文化論集下巻』1982

注②瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡』Ⅰ（本文編）1980

Ⅱ．第14次発掘調査の概要

1．調査の全容

本調査地は第11次調査地の南方約40mの地点にあたる。調査は4×12mの東西に長いトレンチを設定した。当地は今までの第8次・第11次調査から弥生時代前期・後期の遺構の濃密な地域であることや中世館内部にあたるのが予測されている所である。また、地目が畑地で周辺より高い所でもあり、注目される土地であった。調査は畑地の耕土（第1層）から第Ⅲ層まで各層ごと機械力によって除去し、その後は人力によって調査をおこない、中世、弥生後期、弥生前期の三遺構面を確認し、遺構を検出した。

2．遺構

(1)．層序

本地の基本層序は第1層畑地耕土層、第2層畑地床土層、第3層茶褐色土層、第4層淡黒褐色土層、第5層黒褐色土層、第6層暗黄褐色土層、第7層黄褐色粘土層、第8層青灰色シルト層、第9層黒色粘土層である。遺構を確認した層は第5層上面で中世遺構、第6層上面で弥生時代後期、第7層上面で弥生時代前期の遺構を検出した。

(2)．弥生時代前期の遺構

第7層上面で検出した遺構は土坑10基である。土坑、遺物ともに第8次、11次調査より少ない。

S K—201

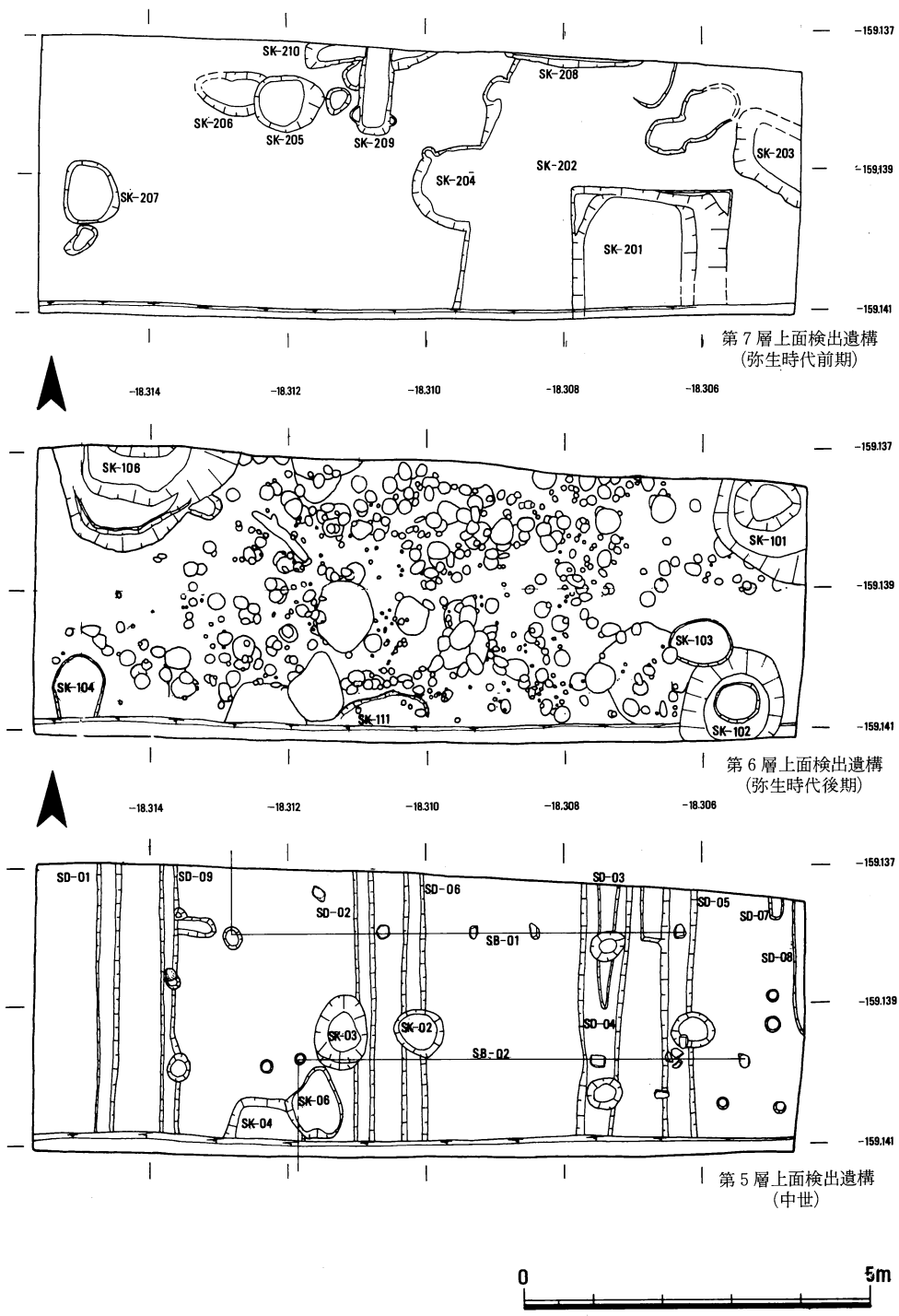
トレンチ南東で検出した土坑である。土坑は一辺約2m、深さ1m、を計る方形プランの土坑である。埋土は大きく二層され、下層は灰黒色あるいは灰青色粘土で第8、9層の土を埋土としていられる。また、上層は暗黄灰色砂質土、灰褐色粘砂層で第7層の土を埋土としていられる。下層ではほとんど遺物を含んでいない。上層でわずかに土器片を検出した。黒色粘土など有機物を含んだ層がみられないことから短期間に埋没したと考えられ、土坑の性格は黒色粘土層を含むものとはやや異なるようである。本土坑はS K—202の土坑を切っている。

S K—202

トレンチの東半にわたる浅い落ち込み状の遺構である。形態規模は不明であるが、西側肩は南北に直線的である。深さは約20cmを計り、底はほぼ平坦であるが、北側では局部的に深くなるところもみられる。埋土は灰黒色粘土層の単一層であるが、S K 201土坑の西側付近では炭化物の集中するところもあった。埋土には土器をほとんど含んでいないが、土坑中央西寄りですべての完形の広口壺一点が出土した。

S K—203

トレンチ東端で検出した土坑である。S K—101、S K—202によって切られており、また、大



第19図 第14次調査遺構平面図 (1/100)

第3表 第14次調査土坑一覧表

土坑番号	平面形態	断面形態	坑底の ベース土層	規 模(m)			時 期	主 要 出土遺物	備 考
				長 軸	短 軸	深 さ			
SK-201	長方形	逆台形	青灰色シルト	不明 (1.9以上)	2.02	1.06	I		
SK-202	(不明)	不 明	黄褐色粘土	不明	不明	0.18	I	完形壺 猪下顎骨	
SK-203	長方形?	逆台形	青灰色シルト	不明 (1.1以上)	不明	0.66	I		上層に焼土・灰
SK-204	楕 円	片面テラスから 逆台形	黄褐色粘土	不明 (0.9以上)	1.2	0.17	I		
SK-205	楕 円	逆台形	黄褐色粘土	1.1	0.81	0.2	I		SK-205を切る
SK-206	楕 円	逆台形	黄褐色粘土	不明 (0.88以上)	0.62	0.32	I		
SK-207	楕 円	逆台形	黄褐色粘土	0.9	0.8	0.34	I		
SK-208	長方形	不 明 (逆台形?)	黄褐色粘土	1.01	不明 (0.17以上)	不明 (0.32以上)	I		
SK-209	長方形	逆台形	青灰色シルト	不明 (1.26以上)	0.48	0.58	I		SK-209を切る
SK-210	長方形	逆台形	黄褐色粘土	不明 (1.9以上)	0.36	0.43	I		
SK-101	正円?	上面 袋状 下面 逆台形	黒 粘	推定径 約1.7m		1.92	V	中・下・最下層 に完形土器群	
SK-102	楕円?	上面 袋状 下面 円筒状	黒 粘	推定1.6m	1.42	1.35	V	中・下層に 完形土器群	SK-102を切る
SK-103	楕 円	逆台形	暗黄褐色土	1.82	1.37	0.13	V		
SK-104	楕 円	椀 形	暗黄褐色土	不明 (1.08以上)	0.86	0.11	V?		
SK-105	楕 円	椀 形	暗黄褐色土	不明 (0.96以上)	0.54	0.29	V?		
SK-106	不整円	2段の 逆台形?	不 明	不明	2.69	不明 (1.02以上)	V	中・下層に 完形土器群	未完掘
SK-107	長方形	逆台形	暗黄褐色土	不明 (0.82以上)	0.63	0.15	V?		
SK-108	楕円?	不 明	暗黄褐色土	2.01	不明 (0.6以上)	0.41	V		
SK-109	長方形	不 明	暗黄褐色土	不明	1.9	0.43	V		
SK-110	楕円?	不 明	暗黄褐色土	不明 (2.65以上)	不明 (0.9以上)	0.18	V?		
SK-111	不整形 楕 円	逆台形	黄灰色粘質土 黄褐色粘土	不明 (2.4以上)	1.63	0.36	V?		
SK-01	楕円?	椀 形	黒褐色土	1.28	不明 (1.35以上)	0.08	中世		
SK-02	楕 円	椀 形	黒褐色土	0.72	0.63	0.1	中世		SD-06を切る
SK-03	楕 円	逆台形	黒褐色土	0.97	0.75	0.26	中世		SD-02を切る SK-08を切る
SK-04	長方形?	椀 形	淡灰褐色土	不明	1.02	0.38	中世		
SK-05	楕 円	逆台形	暗茶褐色土	0.95	0.8	0.08	中世		
SK-06	不整円	逆台形	淡灰褐色土	1.02	0.75	0.37	中世	管玉 土師皿	SK-04を切る
SK-07	楕 円		暗茶褐色土	0.7	0.27		中世		
SK-08	不 明	不 明	黒褐色土	不明	不明	0.18	中世		

半が調査区域外に広がる為、その規模、形態は不明である。おそらく、長方形あるいは楕円形プランになると考えられる。深さ0.7mを計る。堆積土は大きく二層に分層され、上層では焼土・炭及び赤褐色の灰層がみられる。これを除くと下層では黒灰色粘土の堆積で壺や甕などの土器、木片を確認した。

(3). 弥生時代後期の遺構

第6層上面で検出し、最も遺構・遺物が多い。土坑11基、柱穴約550基で土坑と柱穴の関係は現段階では明らかにしえないが、同時併存か、近い時期であろう。

S K—101

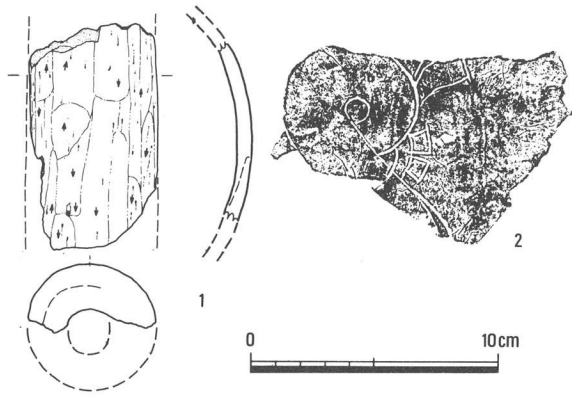
トレンチ北東隅で検出した大形土坑である。検出面ではやや形が不整形であるが、土坑中位ぐらいの形の整っている所では円形プランを呈す。推定径約1.7m、深さ2mを計る。本土坑の断面形態は土坑底より0.8m付近でテラスを有し、オーバーハングしながらち上がる。オーバーハングをしている部分は青灰色シルト層で壁の崩壊によるものと思われる。土坑埋土は黒色粘土で四層に大別される。各層ごとで多量の土器を含んでいる。最下層では広口壺4点、下層では壺・甕など約11点、中層でも下層同様約7点出土している。上層においては完形品を含まず、土器片のみで土器留めの様相を呈している。土器の他、下層より竪杵断片やカゴ状のものに包まれた用途不明木製品が出土している。また、甕の頸部にはつる状の植物を巻きつけたものもみられた。土坑の時期は第V様式後葉で、土坑の性格としては土坑の平面、断面形態より井戸としての機能が考えられよう。

S K—102

本土坑はトレンチの南東隅で検出した土坑で平面プランは推定長軸径1.7m、短軸1.42mの楕円形を呈するプランでS K—101同様二段掘の断面形態をしている。下段の方は長径65cm、深さ15cmを計るこの下段の周壁には葦状の植物によって壁の崩壊を防ぐ施設がみられた。上段部分の周壁は青灰色シルト層で土坑の壁の崩壊によってオーバーハングしている。土坑の上面から底までの深さは1.3mを計る。埋土は三層に大別されるが、中層で3点、下層で7点の完形土器が検出されている。土器群は壺を主体とするものである。S K—101に比べ遺物量は少ない。第V様式中葉に位置づけられ、土坑の性格としては井戸の可能性はある。

S K—106

トレンチ西北隅で検出した土坑で土坑の北半分は調査区域外でその全容は知りえない。東西長さ2.8m、深さ1.1m以上で不整形を呈する土坑で南側にテラスを有し、段掘りの形態を呈す。下段部は完掘していないがこの上面より上方にかけて完形土器を多く検出した。上・中・下層に分層でき、上層では土器片が主で弧帯文様を描いた土器や送風管が出土している。中・下層は黒色粘土層で完形土器が中層から下層にかけて累積した状態で出土し、短期間の廃棄であろう。完形品は中層で14点、下層で21点出土し、壺、甕が主体となる。また、自然木なども出土している。

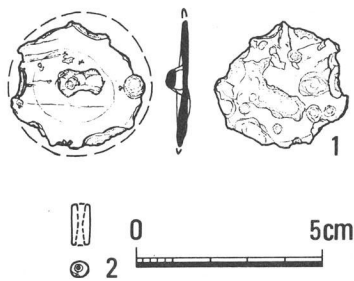


第20図 SK-106出土遺物(1/3)

0.05m・深さ0.1mの小形のものに3大別しえる。これらのピットの関係については、切り合いより埋土の先後関係が認められ、暗褐色土→茶褐色土→黒褐色土の埋土の順になっている。

しかし、ピット間の有機的関連については、調査範囲の制約のために、建築物の存在を指摘しえない。唯一、トレンチ北西部で検出した南東から北西方向の小溝が、住居跡の関連施設の可能性がある。したがってここでは、ピット群のあり方を大・中形のピットに代表させて概観しておく。暗褐色土の埋土をもつものは、トレンチ中央付近に半円形に存在しているようであり、茶褐色土の埋土をもつものは、トレンチ中央付近北半に集中して存在している。また黒褐色土の埋土をもつものは、トレンチ東半に、南と北にわかれて散在している。

なお詳細な建築物の存在に関しては、本報告に譲りたい。



第21図 中世包含層(1)及びSK-06(2)出土遺物(1/2)

SK-06

SB-02の西端で検出した不整円形の土坑である。長軸約1m、短軸0.75m、深さ0.25mを計る。土坑の埋土は上層の灰褐色土と下層の暗灰褐色土の二つに分層され、上層の南肩近くより完形の土師皿二杯検出された。また、下層より管玉一点出土したが、本遺物は弥生時代の所産であろう。

時期は第V様式中葉から後葉にかけての時期である。土坑は完掘していないのでその性格は決しがたいが、土坑の形態や土器のセット関係から祭祀的な土坑の可能性もありうる。

柱穴群

暗黄褐色土をベースとして、その上面から掘り込まれた約550基のピット群を検出した。ピットは大きさから、径0.4m・深さ0.5mの大形のもの、径0.2m・深さ0.2mの中形のもの、

(4). 中世の遺構

SB-01、02

SB-01、02ともにトレンチ中央で検出したが両者ともに梁行は調査区域外にあたるため規模は不明である。おそらく、梁行2間、桁行3間の建物かと思われる。SB-01は桁行3間(6.51m)で柱間は2.17mである。主軸方向はN-84°Eである。SB-02もSB-01同様桁行3間(6.42m)で柱間2.15mを計るが、柱穴一つは未検出である。主軸方向はN-84°Eでいずれも東西棟である。

3. 遺物

(1). 土器

SK-202・203出土土器 (第22図)

1、3、4、6、8はSK-203下層黒粘、2、7は同上層出土である。5、9、10はSK-202灰黒色粘土出土である。1～5は壺である。器面調整にはいずれもミガキが施されている。1は沈線内及びその周辺に丹を塗った痕跡がみられるが、削落が激しく施文構成は不明。3は口縁部の形態から体部の張りのない壺と思われる。黒褐色の塗布が内外面にみられる。4は体部がよく発達し内外面ともミガキが施されている。また断続的に施文がおこなわれている。5は完形品である。口縁部と頸部の境界及び頸部と体部の境界に段を有する。頸部外面は縦位のミガキ、体部では横位のミガキが施され、段部でミガキの方向は異なる。上段部は不明瞭である。内面は体部下半で粗いハケ調整が施されている。底部には植物繊維痕がみられ輪台状を呈する。6、7は甕でいずれも外面にススが付着している。7は口縁部が短く外側へ突出し、体部の張りはほとんどない。なお、7のSK-203の甕はSK-202出土のものと接合した。8は壺の蓋である。全面にミガキが施されている。9は高杯の脚部の可能性がある。内面はナデ調整がみられる。10は高杯である。杯部と脚部の境に貼り付け突帯を有している。口縁部は端面をもち、内外面ともに細かいミガキが施されている。

SK-106出土土器 (第23図)

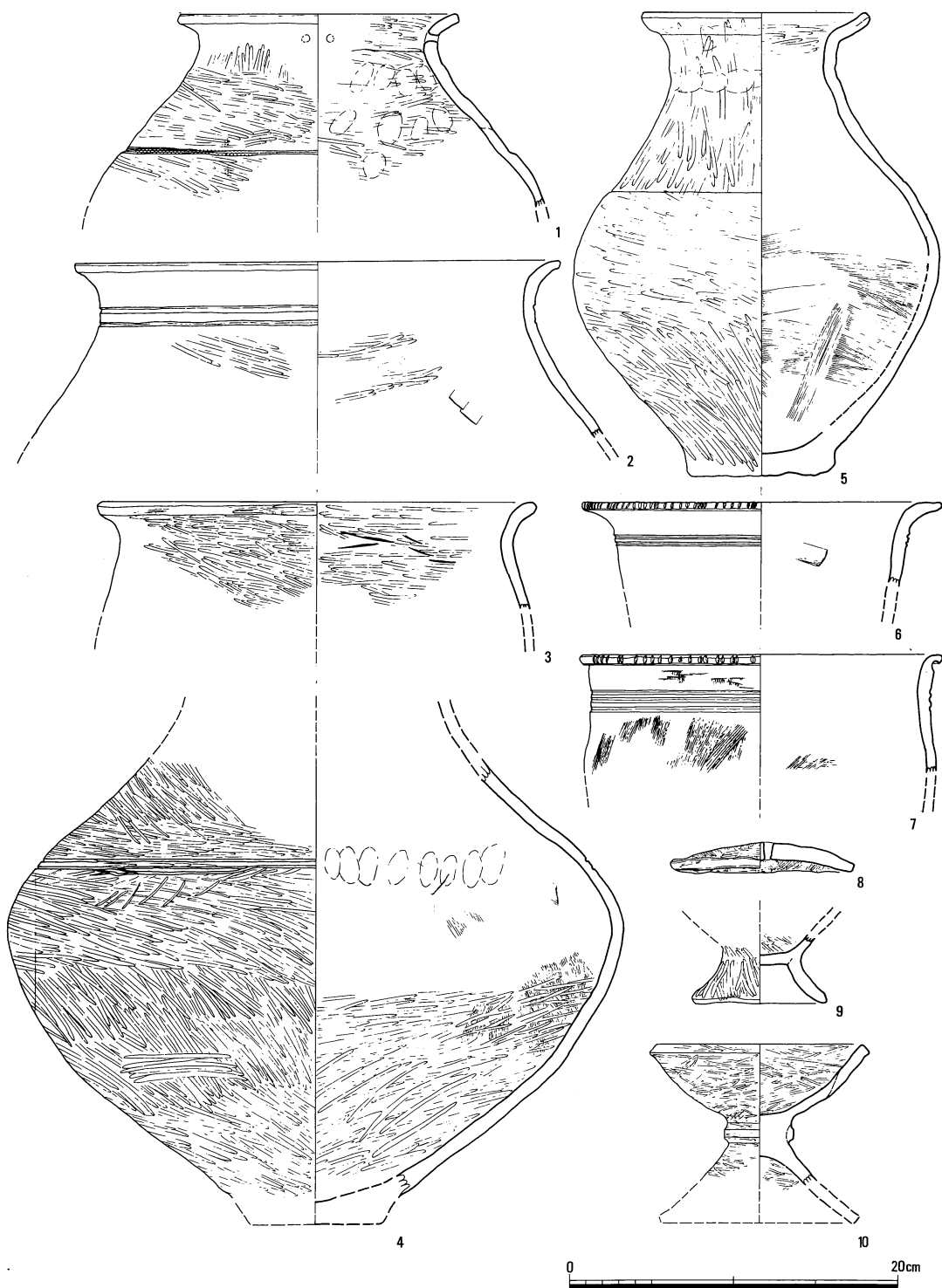
1、6、9、12は中層黒粘、2～5、7、8、10、11は下層黒粘である。

1～5は壺である。1はやや内湾ぎみに斜め上方に広がる口縁部と、中位でよく張った体部をもつ。底部は突出せず、フラットに成形されている。3は短頸壺である。口縁部外面上端には2条の退化凹線をもち、体部は丸みを帯び中位で張る。体部内外面とも、6条/cmの斜めハケ調整で仕上げられている。5は近江系と考えられる壺である。やや外傾し丸みを帯びた受口状口縁と、外面から削り出して突出させた上げ底状の底部を持つ。細条のハケと粗いミガキにより仕上げられているが、体部上半にはタタキ目が強く残置しており、粘土接合痕も明瞭に観察できる。色調は淡赤褐色を呈する。

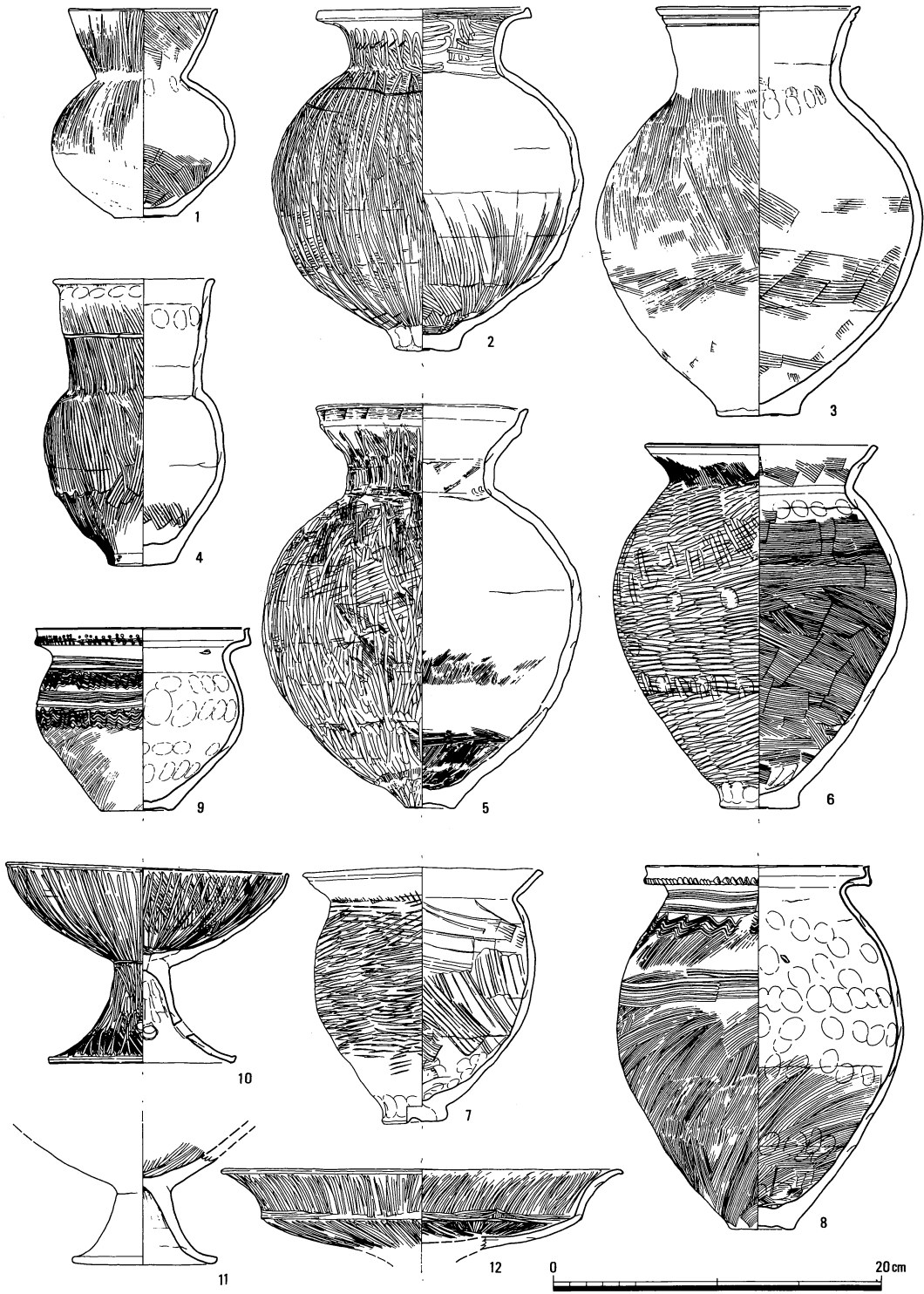
6～8は甕である。8は近江産の搬入土器である。口縁部はやや内傾ぎみに直立し、外方にシャープにつまみ出された端部をなす受口状口縁である。底部は突出せず、上げ底状を呈する。体部外面は全面にわたって斜位のハケ調整がおこなわれている。その後体部上半に、上から下方へ粗い楡状工具によって楡描き文が施されている。色調は淡灰色を呈する。

9は鉢である。8と同様、近江産の搬入土器である。口縁部は直立し、外方にシャープにつまみ出された受口状口縁をなし、突出せず上げ底状の底部をもつ。色調は淡灰色を呈する。

10～12は高杯である。10は碗状の杯部をもつものであり、製作技法は退化した円盤充填を用いている。杯内外面は、やや粗い放射状のミガキで仕上げられている。



第22图 SK-202、SK-203出土土器(1/4)



第23图 SK-106出土土器 (1/4)

弧帯文を有する土器（第20図—2）

壺の体部中位から上位にかけての破片である。外面にヘラ状工具で描かれた弧帯文が観察される。弧帯文は文様の上端と下半を失っているが、並走するヘラ描文による帯表現の「8」字状文を中心にして、「8」字状文の交差部の左右には扇状文と撥状文、上下端には撥状文を施していると推定される。

文様の表現は「8」字状文から始められ、周囲の文様に終わっている。詳細に述べれば、「8」字状文は、(1). 上部外線を左回りに引き下す、(2). 上部内線を左回りに引き下す、(3). 土器を反転、(4). 「8」字状文下部の曲線を描く。同時に(2)の修正線を描くという順序でおこなわれている。

本資料にみる弧帯文はその文様形態の特質からみて、吉備地方の特殊器台文様である「立坂 a・b」両者に近似している。つまり、本資料を縦位に抽出すれば「立坂 a」に近似する文様がえられ、横位に抽出すれば「立坂 b」に近似する文様がえられる。しかし施文方法自体は畿内の土器絵画の手法と同質であると考えられる。

したがって本資料の持つ意義は、畿内、吉備両地方での弧帯文の成立期の関連をうかがわせることにあり、ひいては「立坂 a・b」の差が、本来の文様からの抽象部位の差である可能性のあることも示している。

(2)鏡、送風管、管玉

鏡（第21図—1）

青銅製鏡で現面径3.7cmを計るが、縁辺がやや欠失しており復元するならば径3.9cmになる。背面には内・外区の区別や文様はみられない。また外縁部は肥厚しているが端面はなく鋭い。鏡面は錆がひどく、わずかに原形をとどめており、微細な擦痕がみられる。深緑色を呈す。

送風管（第20図—1）

現長9.2cm、復元径5.2cmで厚さ2.0cmを計る。両端は欠失しているため、その全容は知りえない。外面は粗いケズリを両端方向からおこなっている。また、内面には棒状のものをぬきとった痕跡がみられる。本品の成形は棒状のものに粘土板を二重ぐらゐに巻きつけ、外面をケズることによって整形したと思われる。胎土は1mm程の砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈す。火熱による変化はみられない。本遺物は第3次調査時に検出されたものに類似している。SK-106上層出土である。

管玉（第21図—2）

濃緑色の流紋岩質溶結凝灰岩製（福井・九頭龍川流域産）である。長さ1.1cm、径0.5cmを計る。孔は両小口より穿孔している。外面はよく研磨されている。SK-06上層出土である。

4. まとめ

(1). 本調査地は弥生前期以来の居住地であることが判明したが、弥生前期の段階では遺構の密度や遺物量からするとこの地より北東にその中心があったと思われる。しかし、前期でも古い段

階の遺構のみである点は注目すべきことで第8・11次を含めたこの地が当初より居住地であったことがうかがえる。

(2). 弥生後期においては完形土器を包蔵する土坑と柱穴が主である。柱穴はその多さからかなりの建てかえがあったと思われる、今後井戸と思われる土坑との関係を明らかにしていく必要がある。

(3). 中世においては今回初めて建物二棟検出し、館内部の実態解明の一つの手懸かりを得た。これまでの館の濠の発掘によってほぼ館の範囲をおさえることができていたが、今後館の時期的変遷を詳細にとらえ、その様相を明らかにしていく必要がある。

(4). 遺物については今回、弥生時代後期の土坑一括資料が注目される。後期中葉から後葉にかけての土器群でS K—101では約22点、S K—102では約10点、S K—106では約35点完形品が検出されており、出土状況からかなり一括廃棄性の強いものである。S K—106では近江産と思われる壺・甕・鉢が出土しており地域相互の併行関係とともに、このような形で近江産のものが当遺跡で検出されたことは初めてでもあり、今後、土坑の性格、土器編年で注目されるものである。

(5). 送風管の出土は第3次調査以来のもので、一時期一地区での単期間の鑄造と考えるよりも、当遺跡では継続的に鑄造がおこなわれていた可能性もでてきた。今回の調査では送風管一点のみであったが、周辺地域を含めた地区は今後十分な調査が必要であろう。

(5). 青銅製鏡は中世包含層より出土したため、年代的決め手はない。しかし、当地の遺構の状況からすれば弥生前期と後期が主であり、他の時代のものの中世になることから、本遺物は弥生後期の可能性が大きい。当遺跡では鏡は初めての出土で本遺跡での鑄造は十分に考えられる。唐古・鍵遺跡では銅鐸の他、銅鏃や鏡、ガラス製勾玉など製作していた可能性は大きい。

(6). 弧帯文を描いた土器は土器自体や出土遺構から第V様式中葉から後葉にかけての時期に属すると思われる。本文様は吉備地方などの特殊器台文様を考える上で重要な資料と思われ、文様の抽象化のしかたなど特に注意をひくものである。この抽象化される以前の、元になる文様も存在した可能性があり、畿内・吉備両地域の年代的併行関係が厳密になされていくことにより本文様のもつ意義も高まるであろう。

Ⅲ．第15次発掘調査の概要

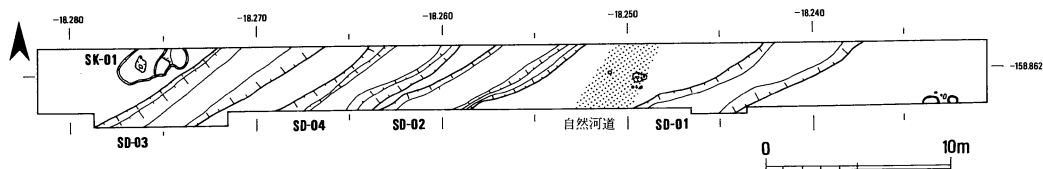
1．調査の全容

本調査地は第12次調査地の南方約15m 地点で4×50m の東西に長いトレンチを設定した。本地は遺跡の北西端にあたる地域で、第12次調査では弥生時代前期の河道や後期の溝5条を確認している。また、第2次調査においても溝4条を検出しているが、第6次調査では湿地状況を確認しており、この周辺地域がムラはずれの一画であることが判明していた。この調査では第12次調査で確認された溝の延長部分の発掘となった。当地は排水の便が悪く、壁が崩壊するなど調査は難行した。調査は水田面に約20cmのヘドロ層（昭和57年8月豪雨による洪水）が堆積しており、この層と水田耕土、床土を機械力によって除去し、その後、人力による調査を進めた。

2．遺構と遺物

(1). 層序

本地における基本的層序は水田上面のヘドロ層を除き、第1層水田耕土、第2層床土、第3層暗灰褐色土層（黄斑文を含む）、第4層淡黄褐色微砂層、第5層黒色粘土層である。全長50m にわたるため、質的变化がみられるが、第5層はトレンチ全搬にみられ、第5層と第4層の間には青灰色粘土や青灰色の微砂が間層としてはいるところもみられる。第3層においても層的に安定しておらず、部分的な質の変化などみられる。遺構は第3層及び第4層上面で検出した。



第24図 第15次調査遺構平面図

第4表 第15次調査溝一覧表

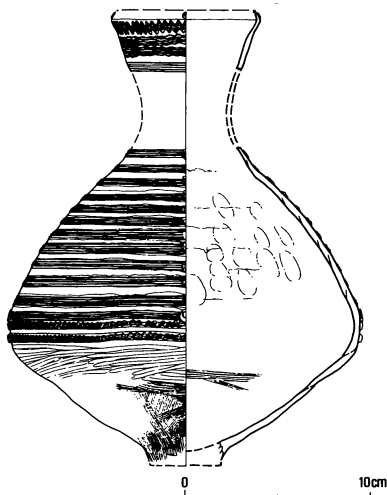
溝 番 号	溝幅 (m)	深 さ (m)	溝 底 レベ ル (m)	走 行 方 向	継 続 時 期					主 要 遺 物	
					I	II	III	IV	V		庄内
SD-01	1	3.0	1.0	45.2	南西→北東			↔			尾張系壺
	2	3.0	0.5	45.7	南西→北東				↔		
SD-02		2.5	0.7	45.3	南西→北北東			↔			木製高杯 太型蛤刃石斧
SD-03	1		0.7	45.0	南西→北東			↔			
	2	2.6	0.5	45.3	南西→北東			↔			木製四脚器
SD-04		2.9	1.0	45.0	南西→北東			↔			

(2). 遺構

弥生時代中期から後期の溝4条と土坑1基、小ピットを検出した。顕著な中世遺構は確認されなかった。

SD-01

トレンチ東端で検出された溝幅3m、深さ1mの溝である。暗灰褐色土をベースに掘削されている。南西から北東方向に走向する溝である。溝の堆積状況から溝さらえをおこなっていると思われる。二層に分層するならば、下層においては第IV様式、上層では第V様式中葉の土器片が出土している。上層の下位には植物沈殿層がみられた。下層より尾張系の壺(第25図)が出土している。



第25図 SD-01中期溝出土土器(1/4)

SD-02

SD-01の西2.5mにおいて検出された南西から北東方向に走向する溝である。溝幅2.5m、深さ0.7mを計り、黄褐色細砂をベースに掘り込まれ、溝底は淡灰黒色粗砂に達している。溝断面はU字状をなす。本溝がトレンチ南壁においてSD-04の東肩部を切っていることから、SD-04の埋没後に新たに掘削されたものであることが確認された。溝の堆積は大きく三層に分層される。下層は青灰色シルトを含む黒色粘土で、その上に植物遺体を大量に含む灰黒色粘土層の中層がある。上層には灰黒色粘土の堆積がみられる。遺物の出土量は少ないが、大半は上層、中層に集中しており、中下層からは第IV様式中葉、上層からは第IV様式末から第V様式初頭の土器片が出土している。また、下層上

面において組合せ式木製高杯(図版26-4)の脚部が、中層より大型蛤刃石斧(図版26-8)の刃部片及び多量の加工木材片が出土した。

SD-03

トレンチ西端で確認された、西南西から東北東方向に軸をとる溝である。発掘によって二度の掘削が確認されたが、そのいずれも弥生時代中期の所産である。

第1回の掘削は暗黄褐色砂質土をベースとしている。溝幅2.8m、深さ0.9mである。堆積土は二大別され、上層(黒色粘土)、下層(灰色粘土)である。出土遺物には微量の土器片がある。

第2回の掘削は最初の溝が粘土で完全に埋没した後に、時間をおくことなくおこなわれているようである。溝幅2.6m、深さ0.6mを計る。堆積土は二大別でき、上層(黒色粘土)、下層(黒色粘土植物含有層)である。出土遺物は少ないが、上層から簾状文で飾られた完形広口壺や柄状木製品(図版26-6)、下層からは溝底より、高杯や木製四脚器(図版26-2、5)が出土している。第IV様式中葉に終焉した溝と考えられる。

S D—04

S D—02の西1mで確認された溝である。南西から北東方向へ軸をとる。淡黄褐色微砂層をベースとして掘削されており、溝幅3m、深さ0.9mを計る。

堆積土は二大別され、上層（暗灰褐色土）、下層（暗灰色粘土）である。ことに上層は黒色・黄褐色のブロック状のベース土を含有することから、整地土である可能性が高い。S D—02に西肩を切られている。出土遺物はきわめて微量であるが、弥生時代中期後半の時期を示している。

(3). 遺物

本調査で出土した遺物は極めて少ない。土器、木器、石器などがあるが、前期の遺物はほとんどなく、中期後半以降のものである。

壺（第25図）

S D—01より出土した尾張系の壺である。体部下半に最大径を有し、その最大胴径部に貼り付け突帯2条をめぐらす。突帯には刻目をいれる。体部上半はハケ状の細かい櫛描直線文を施し、四方に円形浮文を縦列に文様部に貼り付ける。浮文は櫛状工具による押圧がみられる。文様間にはミガキによる暗文が施されている。体部下半はハケ後ミガキをおこなう。口縁部は鋭く内行し、頸部には波状文をめぐらす。器壁は全体に薄い。色調は暗褐色を呈す。

木製高杯（図版26—4）

高杯の脚部で現脚径17.8cmを計る。脚裾及び上端部は欠失している。厚手のつくりで脚柱部は中空で方孔を穿っている。組合せ式の高杯と思われる。カシ材で横木取りである。

木製四脚器（図版26—5）

長径6.3cm、短径3.7cmの楕円形を呈す小形品である。上面は縁辺部がわずかに立ちあがる。底面には半円形の脚部をわずかに0.6cm突出させている。

3. まとめ

今回の調査では溝を4条確認したが、いずれも南西から北東方向に走行するものでムラを囲む環濠であることはほぼ確実である。いままでに検出してきた環濠と思われるものより規模が小さく、また、遺物量も少ないことから当地がムラ内部にありながらも居住区からは離れていた可能性がある。本地は中期後半以降の遺構がかたよることからこの時代頃に土地が安定してきたと思われる。

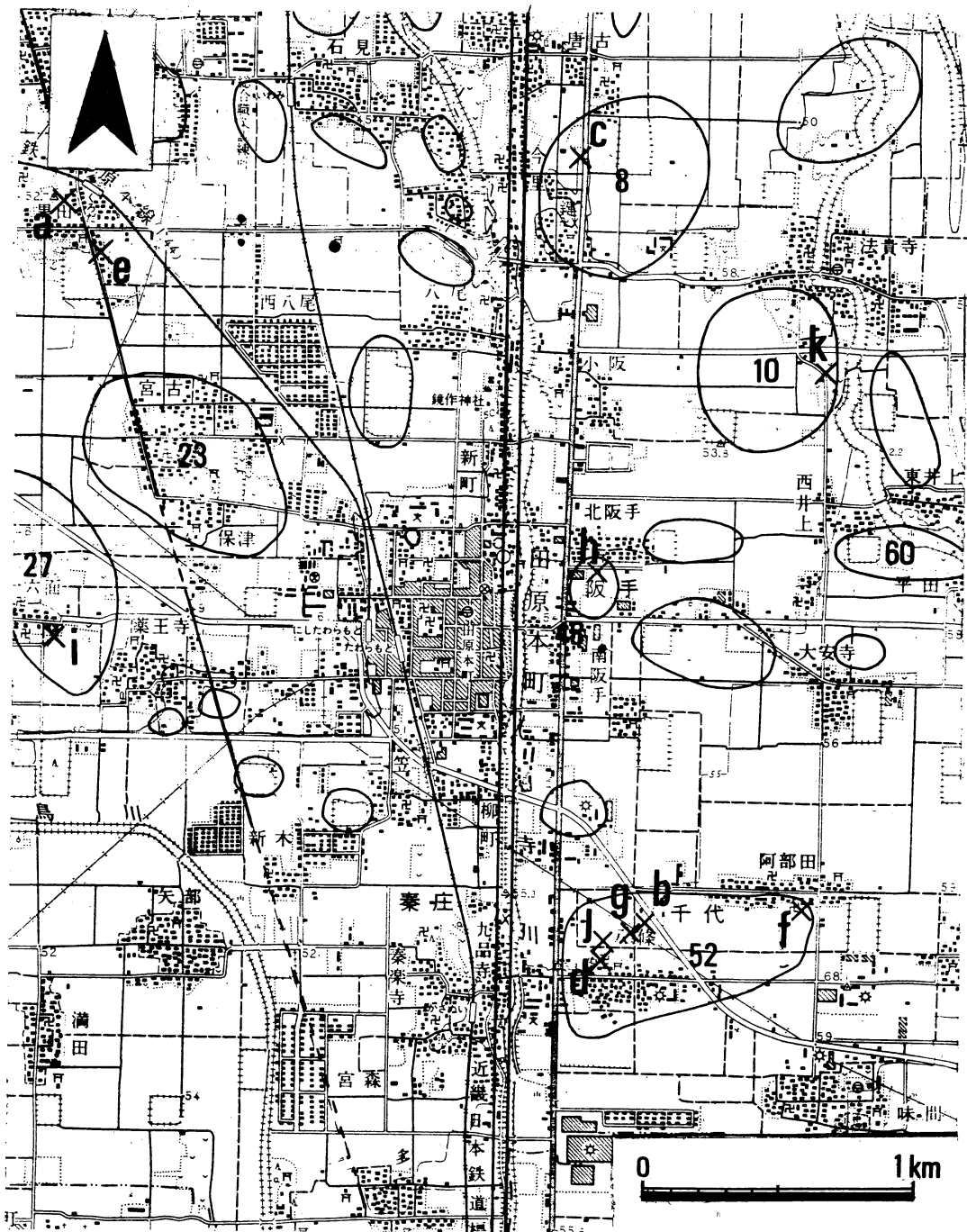
各溝の変遷としてはS D—04、S D—03が中期後半頃、続いてS D—01が掘削される。S D—04埋没後にS D—02が掘削される。S D—03は中期未に再掘削され、この段階でS D—01、02、03が開口することになる。その後、後期中葉にはS D—01において溝さらえがおこなわれている。第12次調査の遺構との関係は第12次のS D—03が第15次のS D—03に、第12次のS D—05が第15次のS D—02につながると考えられる。第15次のS D—01は第12次のS X—06によって切られている可能性がある。また、第15次のS D—04については現在、どの遺構と関連があるのかは判断できず、今後の問題となる。

付 載

第5表 田原本町所在遺跡立会調査一覧表

	発掘届番号	届出者	原因	遺跡名	町遺跡番号 (県遺跡番号)	所在地	調査結果	調査年月日
a	田教157号 田教624号	田原本町教育 委員会教育長	公民館建設	黒田遺跡	田原本14 (11A-72)	黒田293他	中・近世の土器包含層を 確認・発掘調査を実施す る。	昭. 58. 1. 27
b	田教318号	中家秋雄	建材置場	千代遺跡	田原本52 (11C-62)	千代879-1	擁壁部分を立会。1.耕土 (20)、2.床土(30)、3.暗茶褐 色土(30)、4.青灰色砂質土 (10以上)、遺物包含層な し。	昭. 57. 12. 27
c	田教349号	中尾組	国道24号歩道 復旧工事(災 害復旧工事)	唐古・鍵遺跡	田原本8 (11A-66)	唐古57-2 55-2 53-1 52-1	表土約0.5mで黒色土の遺 物包含層(弥生後期)を 確認。 遺構の可能性あり。	昭. 57. 8. 10
d	田教486号 (田建461号)	田原本町長	水路改修	千代遺跡	田原本52 (11C-62)	八条 (集落北側 東西水路)	擁壁部分で立会。1.表土 (竹やぶ20) 2.青灰色粘 質土(水田床土20) 3.黄褐 色砂、青灰色細砂(10以 上) 遺物包含層なし	昭. 57. 11. 23
e	田教486号 (田建462号)	田原本町長	水路改修	黒田遺跡	田原本14 (11A-72)	黒田 (黒田池北 東コーナ ー水路)	擁壁部分で立会。上面は 水路のため60-80削平。 水田面より1m下で1.暗 黄褐色粘土(10)2.暗茶褐色 粘土(5)3.淡茶褐色粘土(10) 4.黄色粘土(3)5.淡青灰色 粘土(10)	昭. 57. 11. 15
f	田教486号 (田建463号)	田原本町長	水路改修	千代遺跡	田原本52, (11C-62)	阿部田 (阿部田集 落南側水路)	現水路の為、上面はすべ て削平。	昭. 57. 12. 3
g	田教643号 (田建677号)	田原本町長	水路改修	千代遺跡	田原本52 (11C-62)	八条 (集落北側 南北水路)	現水路の為、上面は削平。	昭. 58. 3
h	田教644号	桜井土木事 務所長	水路改修	阪手遺跡	田原本48 (11C-58)	北阪手 (北阪手南 側水路かん じょう川)	擁壁部分で土層断面観察 道路面より0.8mは表土 層。それ以下は1.淡黄褐 色砂質土(6)2.黒色粘土(2) 3.暗灰青色粘土(5)4.暗灰 砂(黒色粘土・暗灰青色 粘土のブロック土含む80) 遺物包含層なし。	昭. 58. 3. 8
i	田教679号 (田建728号)	田原本町長	道路改良工事	十六面・薬 王寺遺跡	田原本27 (11C-37)	十六面 (十六面南 側道路)	1.水田耕土(20)2.床土(2)3. 灰褐色土(3)4.茶灰色土(4) 第3、4層で遺物包含層 を確認。 発掘調査をおこなう。	昭. 58. 3. 26
j	田教710号	橋本嘉文	宅地造成	千代遺跡	田原本52 (11C-62)	千代870-2	擁壁部分で立会。床土層 までで遺構面に達してい ない。	昭. 58. 3
k	田教713号	田原本町長	水路工事 (災害復旧)	法貴寺遺跡	田原本10 (11A-68)	法遺寺	工事終了後立会。表土下 0.6mで茶褐色土を確認。 古墳時代後期、中世・近 世土器を表探。	昭. 58. 3. 27

※()の数字は土層の厚さを示す。単位cm

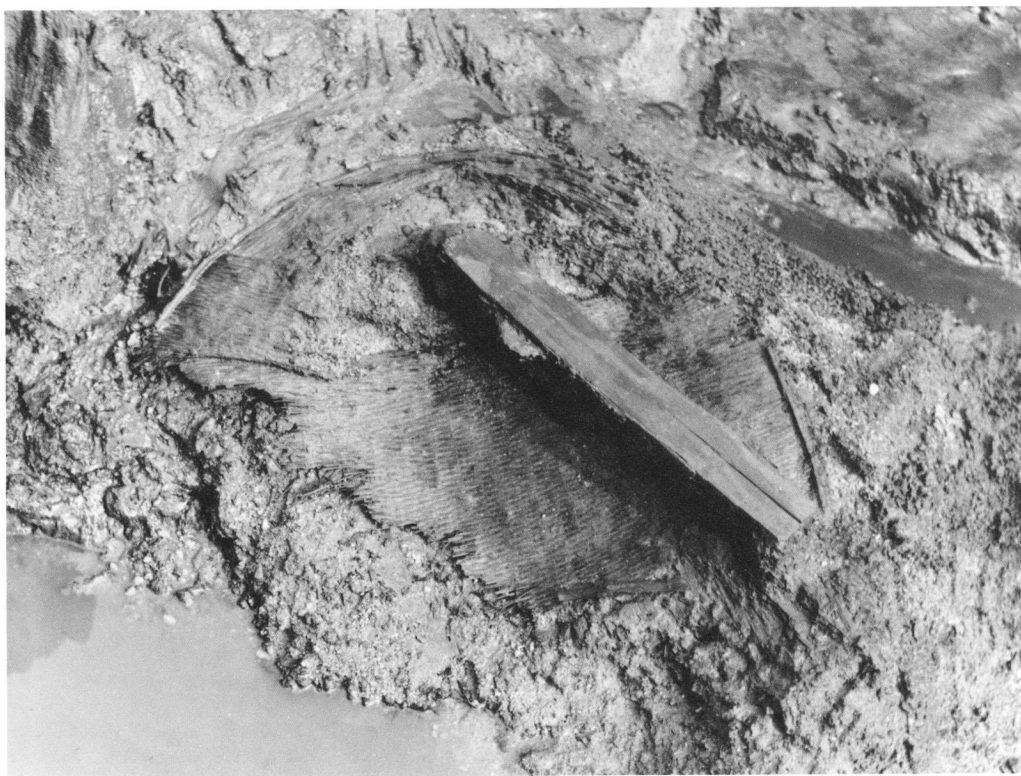


第26図 田原本町所在遺跡と立会調査地

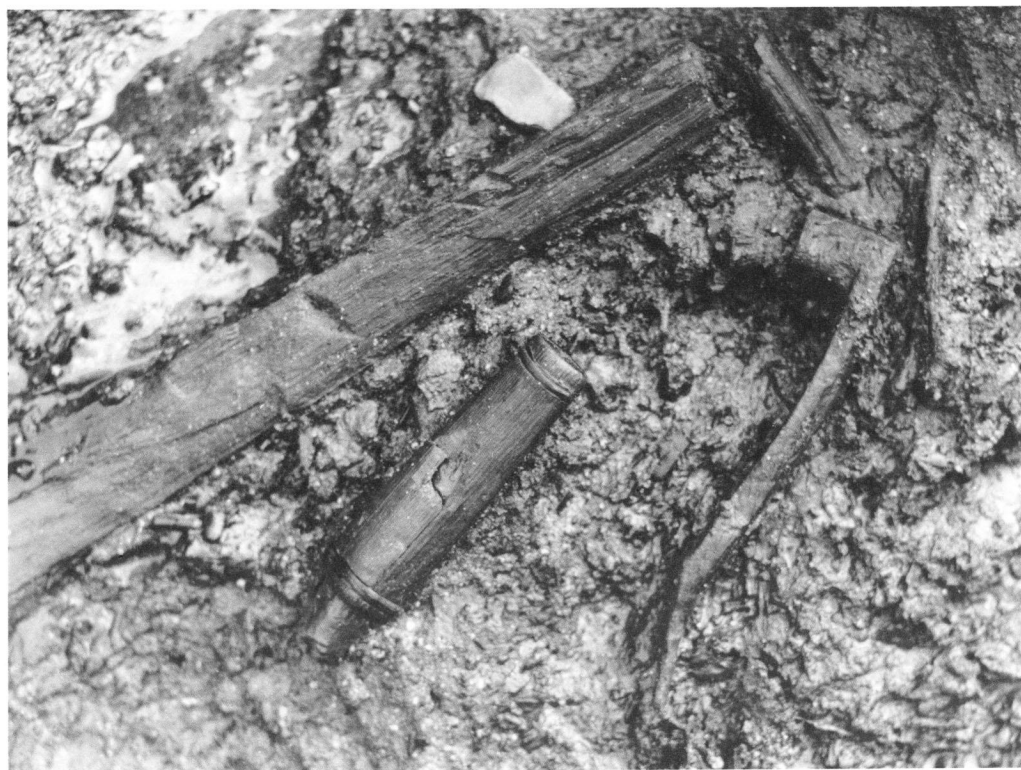
(数字：田原本町遺跡番号)
 (アルファベット：立会調査地点)

8. 唐古・鍵遺跡 10. 法貴寺遺跡 23. 保津・宮古遺跡 27. 十六面・薬王寺遺跡
 48. 阪手遺跡 52. 千代遺跡 60. 平田遺跡

圖 版



a. S D-02中期溝 箕出土状況



b. S D-02中期溝 鞘入り石剣出土状況



a. S D-04 上層 土器出土状況 (西から)



b. S D-04 完掘状況 (東から)



a. SD-05庄内期溝 土器出土状況（南から）



b. SD-05中期溝 完掘状況（南から）



a. SD-06中期溝 完掘状況（西から）



b. SD-06中期溝 原木出土状況（北から）



a. S D—06中期溝 中層遺物出土状況(1)



b. S D—06中期溝 中層遺物出土状況(2)



a. S D—06中期溝 中層遺物出土状況(3)



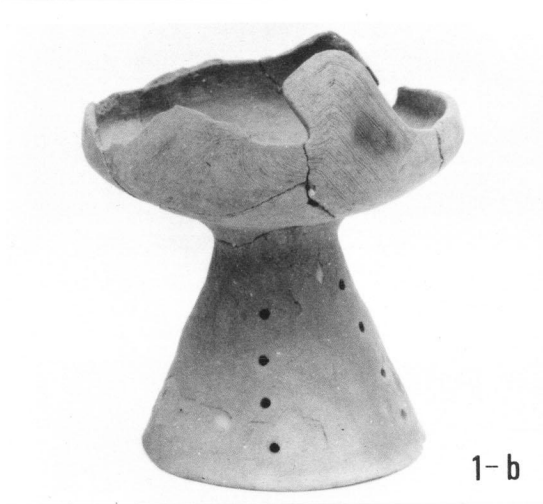
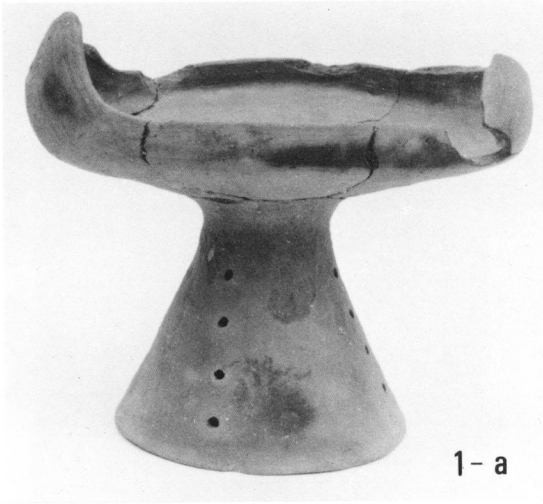
b. S D—06中期溝 最下層イノシシ出土状況



a. SK-05 遺物出土状況



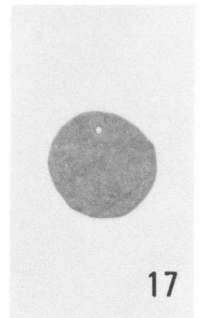
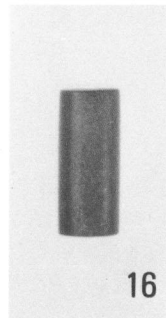
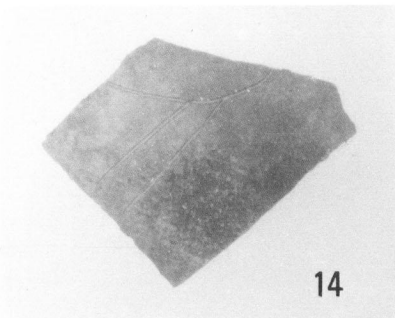
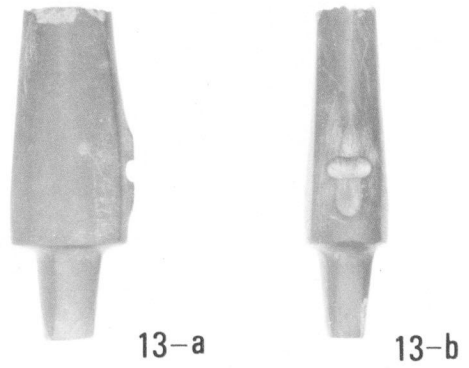
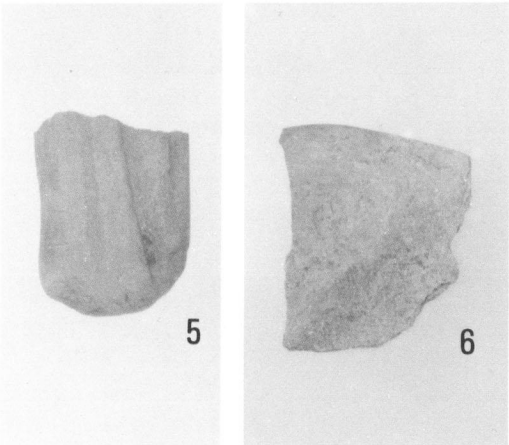
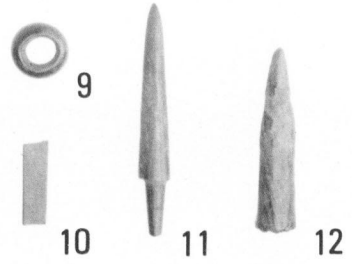
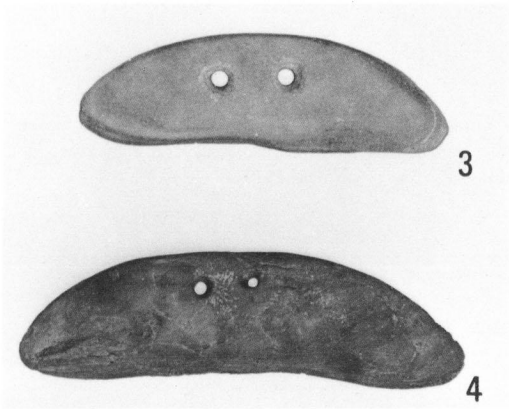
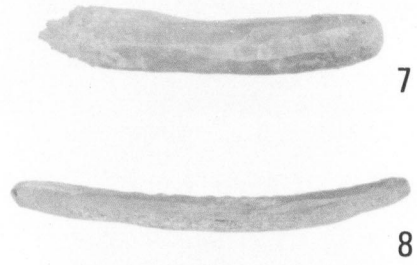
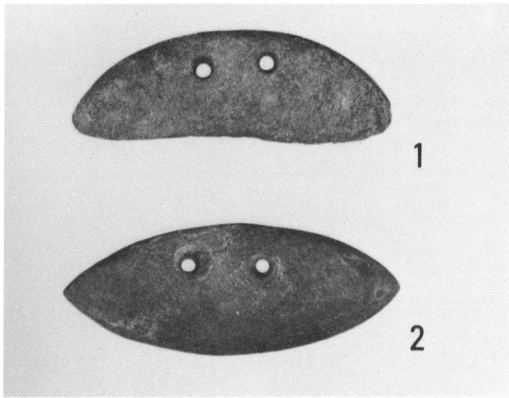
b. SK-07 遺物出土状況



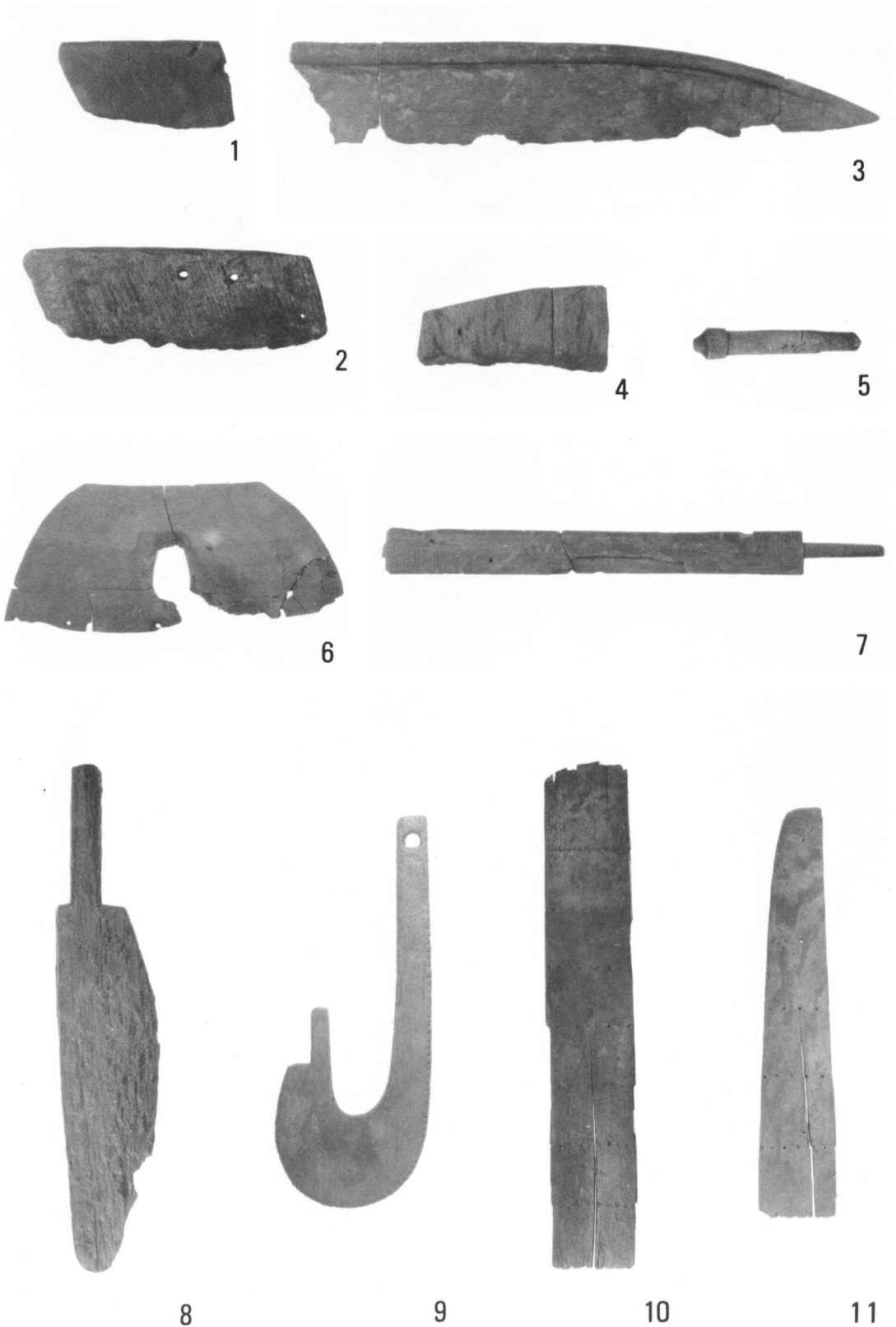
S D-02中期溝：〈1, 2〉下層、〈3, 4〉中層出土土器 (1/3)



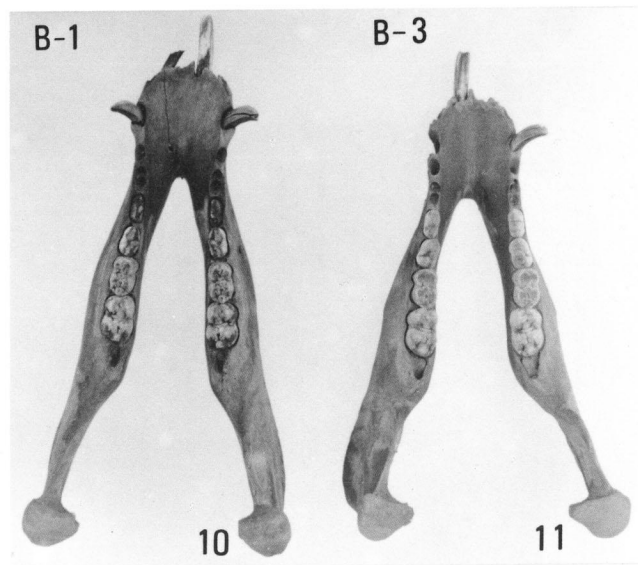
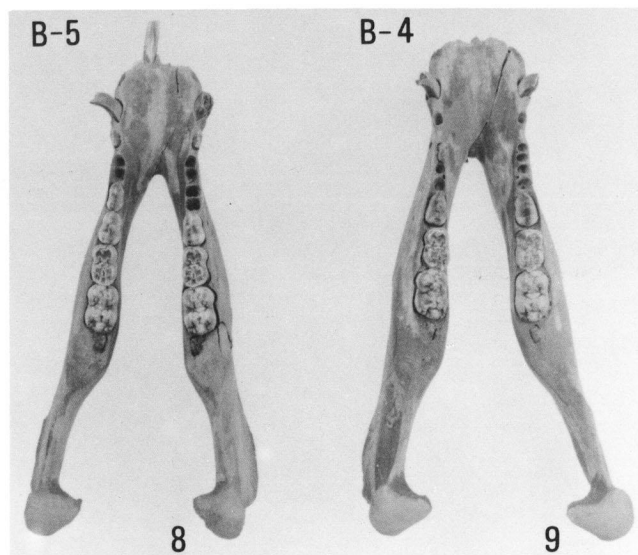
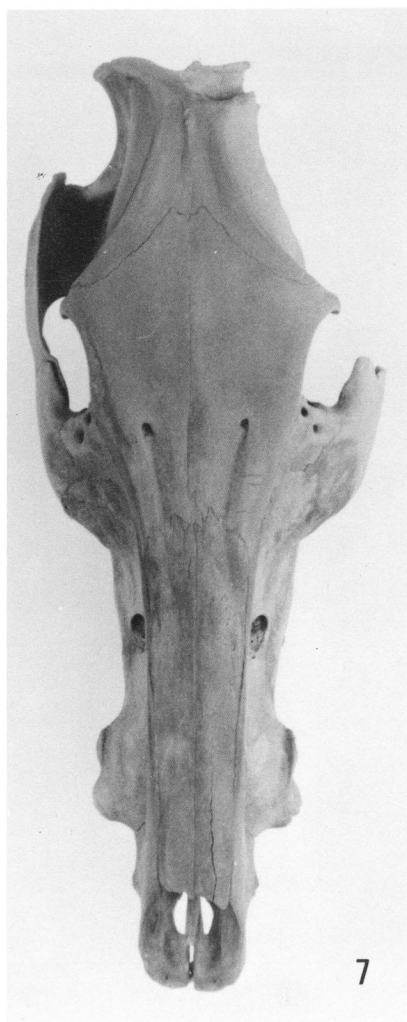
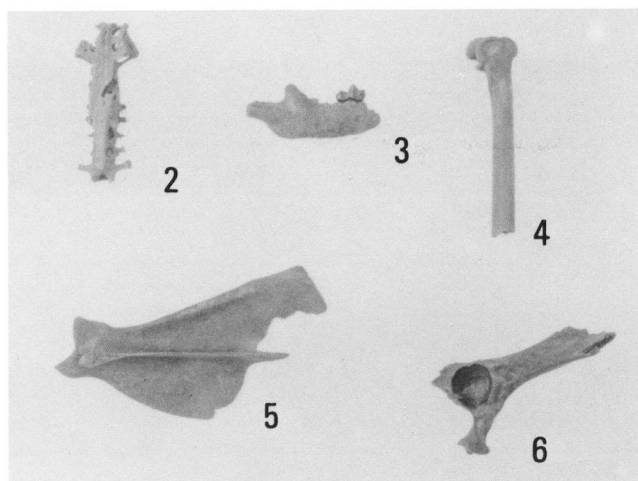
SK-05 〈1~3〉、SK-07 〈4~6〉 出土土器 (1/3)



S D—05中期溝：〈6〉下層 大形石庖丁、S D—06中期溝：〈8, 9〉上層、
 〈1~5, 7, 10, 12, 14, 16〉中層、〈13〉下層、〈11, 15〉最下層、S D—
 06後期溝：〈17〉、7~12骨角製品、1~6, 14 (1/2)、7~13, 12 (1/2)、



SD-02中期溝：〈3, 5, 8, 10〉下層、SD-06中期溝：〈1, 4, 6, 7, 9, 11〉中層、SK-07 〈2〉、1~5 (1/3)、6~11 (1/6)



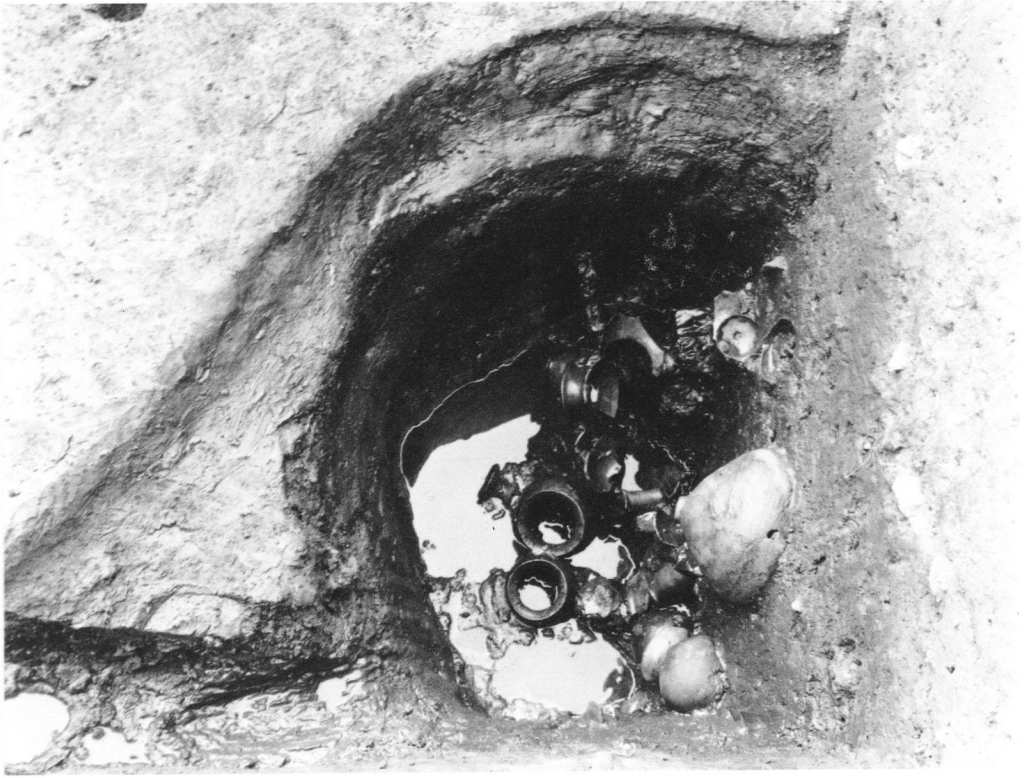
S K-07 : <1> 人骨、S D-05中期溝 : <3, 6> 下層 イヌ、S D-06中期溝 : <2, 5> 下層、<4, 7~11> 最下層、イノシシ他 1~11 (1/3)



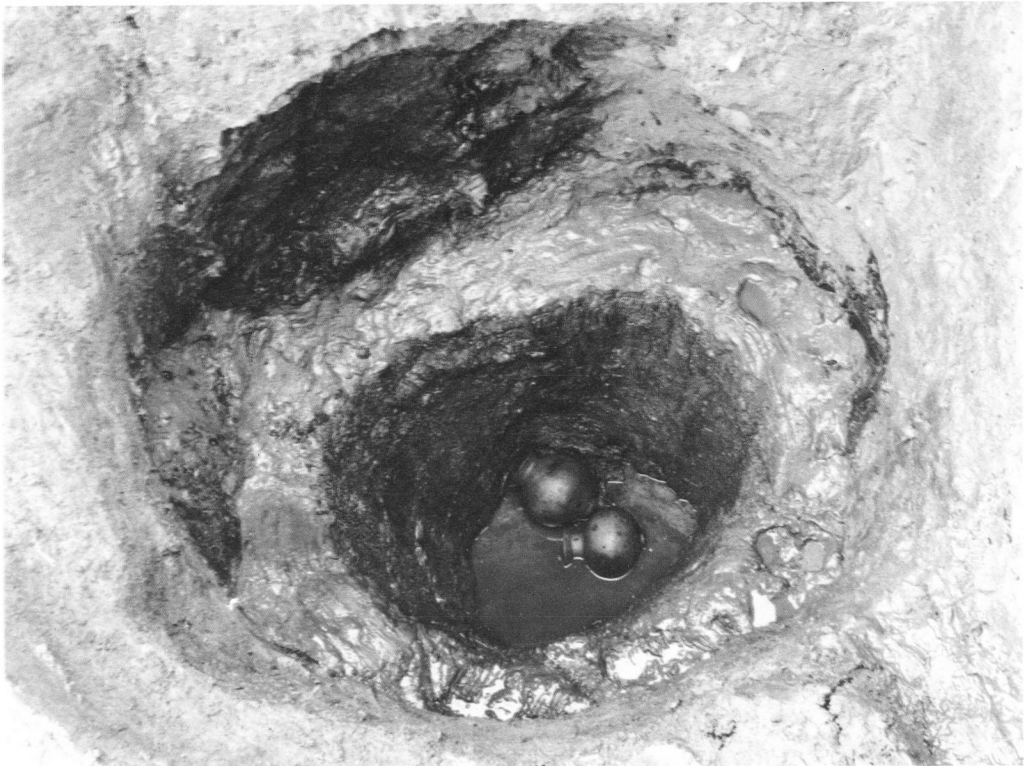
a. 中世遺構検出状況（東から）



b. 弥生後期遺構完掘状況（東から）



a. SK-101 下層土器出土状況



b. SK-101 最下層土器出土状況



S K—102 中層土器出土状況



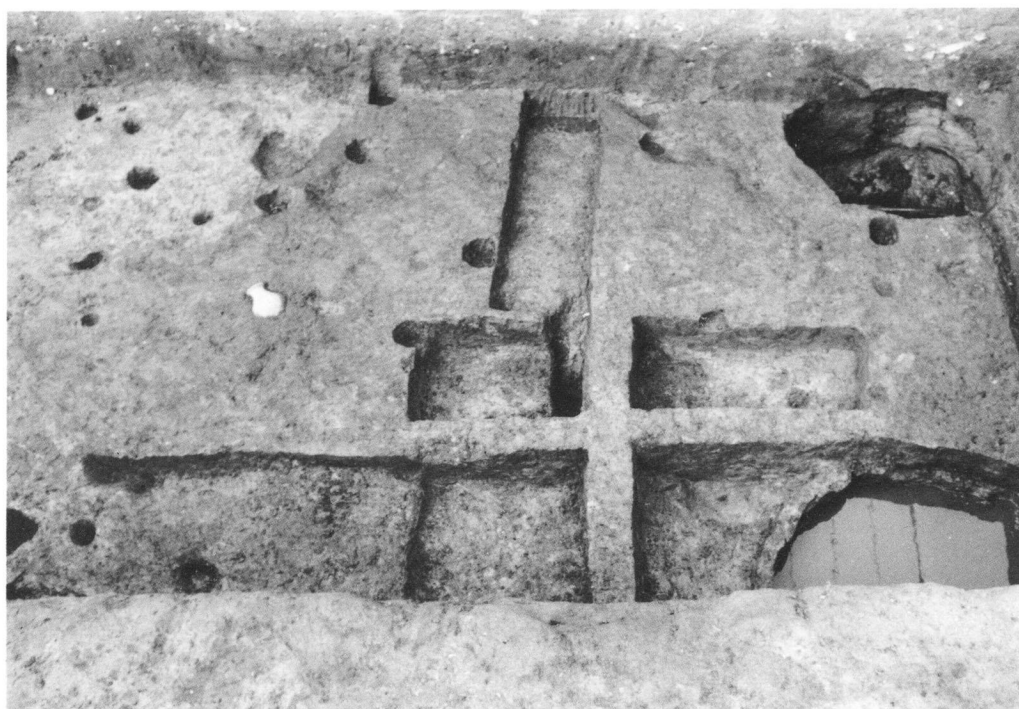
S K—102 下層土器出土状況



a. SK-106 中層土器出土状況



b. SK-106 下層土器出土状況



a. SK-201, 202 検出状況 (南から)



b. 彌生前期遺構完掘状況 (東から)



1



2



3



4

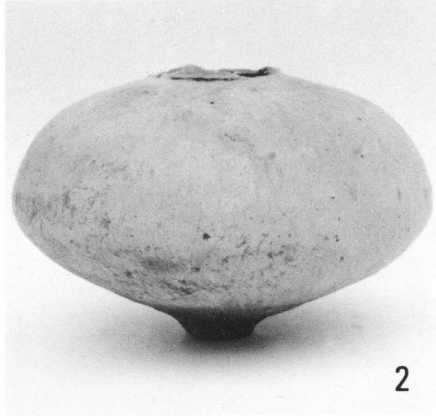
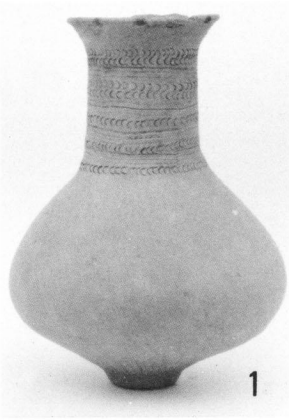


5

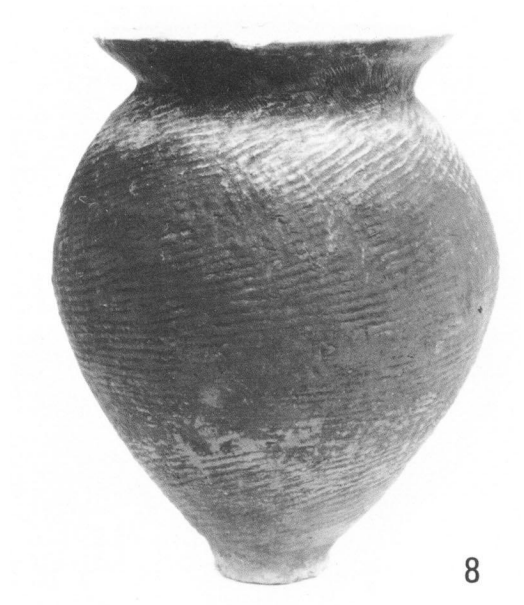
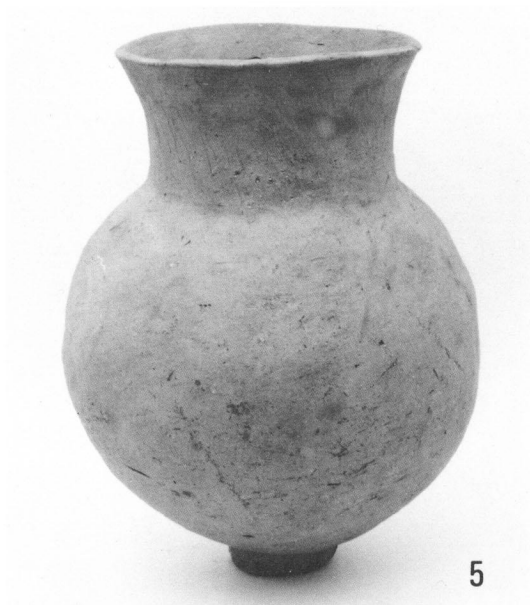


6

S K-101 : 〈1~4〉 下層、〈5, 6〉 最下層出土土器 (1/3)



S K102: 〈1, 2〉中層、〈3~7〉下層出土土器 (1/3)



S K-106 : 〈1 ~ 8〉 中層出土土器 (1/3)



1



4



2



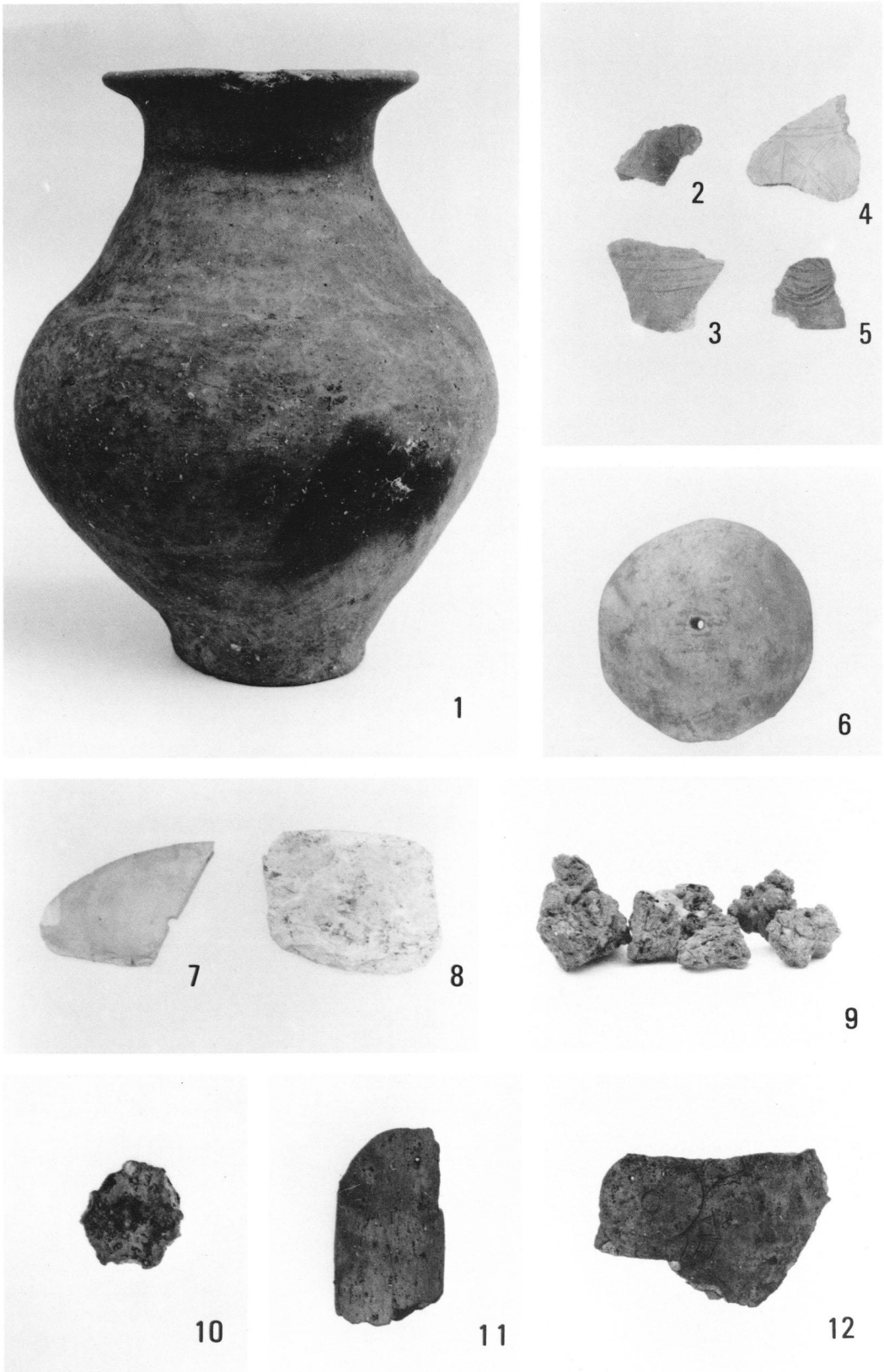
5



3



6



S K—202：〈1～3〉土器、S K—201：〈4，5〉土器、S K—203：〈6〉土器、
 第6層：〈7〉石庖丁、S K—210：〈8〉石器、S K 209：〈9〉焼土、第3層：〈10〉
 鏡、S K—106：〈11〉送風管・〈12〉弧帯文様、1～8、11、12 (1/3)、10 (1/2)



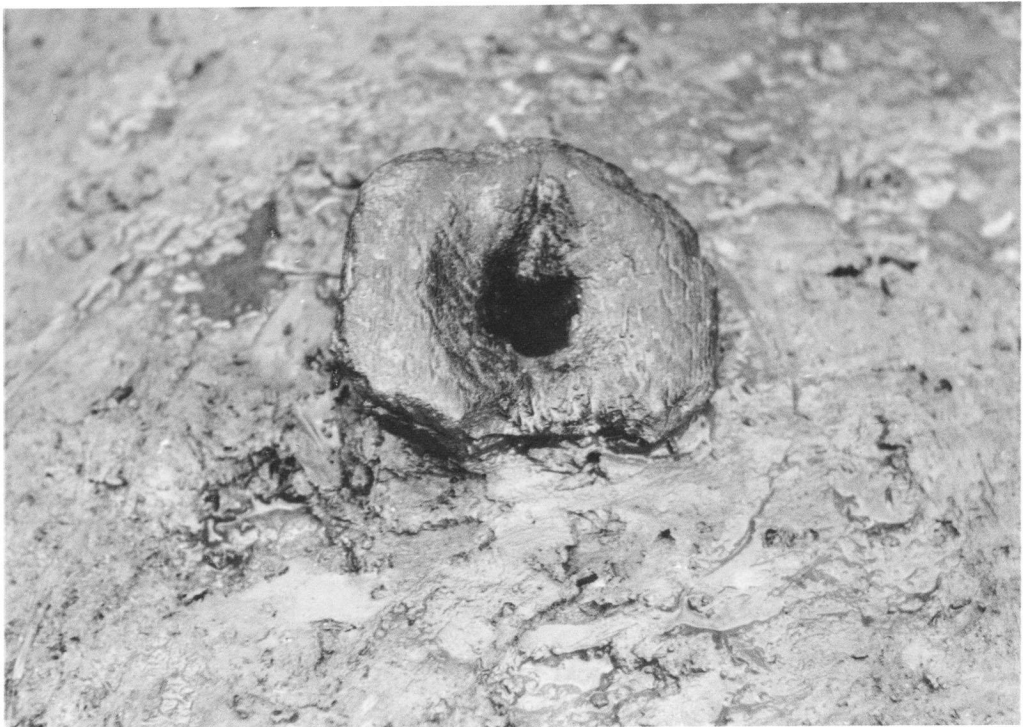
a. トレンチ全景（東から）



b. S D-01 完掘状況（東から）



a. SD-02 完掘状況（南から）



b. SD-02 木製高杯出土状況



a. SD-03-② 完掘状況（南から）



b. SK-01 遺物出土状況



1



4



2



3



5-a



5-b



6-a



6-b



7



8

SD-01: <1> 土器、SD-02: <4> 木器、<8> 石器
SD-03: <2, 3> 土器、<5, 6> 木器、<7> 石器
1~4、6~8 (1/3)、5 (1/2)

田原本町埋蔵文化財調査概要 1
—昭和57年度唐古・鍵遺跡第13・14・15次
発掘調査概報—
昭和 58 年 3 月 31 日
発行 田 原 本 町 教 育 委 員 会
印刷 関 西 美 術 印 刷 株 式 会 社